平成23年度文教大学学園経営戦略事業

第2回地域連携フォーラム・シンポジウム報告書

東日本大震災により県内に避難した子どもたちへの支援のための地域連携

文教大学大学院人間科学研究科　主催

三郷市教育委員会・越谷市教育委員会　共催

はしがき

文教大学人間科学部　今野　義孝

文教大学人間科学研究科は、平成22年度より地域連携事業として、三郷市教育委員会、越谷市教育委員会と連携して、地域連携フォーラム・シンポジウムを開催しております。第1回目のフォーラム・シンポジウムは、平成23年2月12日に開催されました。このときのテーマは、「子どもたちの豊かな人間関係を求めて～家庭・学校・地域・大学の連携協力の在り方を考える～」でした。その結果、いじめや不登校、ひきこもりなどの問題に家庭や学校、地域の環境要因が大きく関係していると考えられることから、このテーマは地域連携事業の基調として、今後も継続・発展させていくことが確認されました。

それから1カ月後の平成23年3月11日に、東日本大地震が発生し、太平洋沿岸を中心とする東北地方に甚大な被害をもたらしました。埼玉県内の避難所では、多くの被災者が困難な生活を強いられました。子どもたちは住み慣れた土地や親きょうだいと離れ、新しい地域・学校・友人との関係づくりに大きな不安や困難を抱えていました。避難してきた子どもたちが安心して暮らすことのできる学校や地域をつくることは、とりもなおさず、すべての子どもたちが求めている安心・安全の学校や地域をつくるという地域連携事業の基調が試されることでもありました。

そこで、今年度のフォーラム・シンポジウムでは、三郷市や越谷市に避難した子どもへの支援や県内に避難した子どもたちへの支援を通して、子どもたちの豊かな人間関係を育む家庭・地域・学校・地域・大学の連携の在り方について検証することにしました。今年度のフォーラム・シンポジウムには、三郷市教育委員会、越谷市教育委員会、特定非営利活動法人MiKOねっと、さいたまコープ地域ネットワーク、NPO法人子育てサポーター・チャオが、それぞれの支援活動の実態について話題提供を行ないました。その結果、それぞれの機関や団体が今回の地域連携事業を通して、あらためて相互に連携しながら支援活動や普段の地域活動を展開していくことの必要性を実感し、今後も連携しながら地域のつながりに貢献していくことを確認しました。そのなかで、文教大学大学院人間科学研究科は、それらの機関や団体間の相互連携の橋渡しの役割を果たしました。また、人間科学研究科が、援助方法の伝達講習や学生ボランティアの養成と派遣などの資源提供を期待されていることもあらためて明らかになりました。

今年度のフォーラム・シンポジウムの成果の最大のポイントは、子どもたちへの寄り添う援助の重要性とその具体的な方法を共有し合えたことです。それは、避難してきた子どもたちへの支援を通して、普段からの地域づくりと子ども支援の大切さの再認識をもたらしました。第2のポイントは、子どもたちのしなやかでたくましい姿が、支援者に対しても感謝と勇気を与えたことです。このことは、支援は一方的に施すものではなく、相互に支援し合うという「互恵性」の関係であることを再認識させてくれました。第3のポイントは、地域連携フォーラム・シンポジウムの開催とそれに向けた打合せ会議を通して、これまで個々に活動してきた機関や団体の間にネットワークが形成されることになったことです。

今後も、さらなる地域連携の推進を期して、今年度の活動のご報告をいたします。

目　次

1．フォーラム・シンポジウム要項 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2．フォーラム・シンポジウムの内容 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

3．資料集
(1) 三郷市教育委員会学校教育部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

(2) 越谷市教育委員会教育センター ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

(3) 特定非営利法人 MiKO ねっと ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

(4) さいたまコープ地域ネットワーク ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

(5) NPO 法人子育てサポーター・チャオ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

フォーラム・シンポジウム要項

1．フォーラムの日時・場所

(1) 日　時：平成24年1月28日（土）、午後2時から4時半

(2) 場　所：文教大学12号館12102教室

2．フォーラムのシンポジスト等

(1) 趣旨説明：今野　義孝（文教大学人間科学部）

(2) 司　　会：佐藤　啓子（文教大学人間科学部）

(3) 話題提供：大野　正浩（三郷市教育委員会学校教育部）
斎藤　紀義（越谷市教育委員会教育センター）
工藤　トモ（特定非営利法人MiKOねっと）
根岸　公江（さいたまコープ地域ネットワーク）
雲雀　信子（NPO法人子育てサポーター・チャオ）

(4) 指定討論：谷口　清（文教大学人間科学部）

(5) ま と め：佐藤　啓子（文教大学人間科学部）

フォーラム・シンポジウムの内容

[司会]

こんにちは。私は本日の司会を務めさせていただきます文教大学人間科学部の佐藤啓子と申します。これから第２回地域連携フォーラム・シンポジウムを始めさせていただきます。今日は大寒の最中ですが、このように多数の方々にお集まりいただいたことに感謝申し上げます。昨年３月 11 日に発生した東日本大震災・津波・原発事故により、三郷市や越谷市には多くの方々が避難されました。今回のシンポジウムでは、三郷市・越谷市・大学の連携のもとに、子どもたちへの支援をめぐって、東日本大震災で県内に避難した子どもたちへの支援のための地域連携をテーマのもと開催する運びとなりました。

それでは、本学人間科学部の今野義孝先生に、このシンポジウムの企画趣旨の説明をお願いいたします。

[今野]

皆さんこんにちは。私は、今回のフォーラム・シンポジウムを企画させていただいた文教大学人間科学部の今野義孝です。今日はとてもお寒い中を第２回地域連携フォーラム・シンポジウムにお越しいただき心から感謝申し上げます。私ども文教大学大学院人間科学研究科では、地域と連携しながら地域に貢献できるような活動を通して、地域の方々に大学院の活動を知っていただけるよう努めております。そのなかで地域連携を重視した取り組みに着手してきました。どんなテーマでこの地域連携を深めていくかをいろいろ考えまして、やはり次世代を担う子どもたちの育成に焦点を当てることが大切ではないかと考えました。そこで、子どもたちが豊かに生きていくためには、家庭や地域、それにさまざまな資源とつながり、調和しながら豊かな心を育むための土壌をつくっていくことが大切だと考えました。そういうことを念頭におきまして、昨年からこのフォーラム・シンポジウムを始めました。

子どもたちの置かれた現状は非常に大変な状況だと思います。その具体的な表れとして不登校やいじめなどのさまざまな問題が出ています。こうした問題は、やはり子どもたちが自分の居場所をしっかりと持ちにくいことを反映していると思います。日頃から先生方や保護者の方々は皆で力を合わせて子どもたちの居場所づくりを一生懸命にお考えになっており、子どもたちに良い環境資源を提供するご努力をなさっておられます。しかし、なかなかそうした資源が単体としてはうまく機能してもネットワークでつながっていかないという問題がありました。そこで、昨年度から、いろいろな地域でさまざまな取り組みをなさっている人たちが、ここにはこんな資源があることを紹介しあい、お互いに活用していただけるようにしたいという趣旨でこのフォーラム・シンポジウムを始めたわけです。そして、私ども文教大学大学院人間科学研究科が、そのつながりの役割を担わせていただければと思ったわけです。

当初、今年度の地域連携事業は昨年度の内容の継続を考えていました。しかし、東日本大震災が発生し、それによって福島に被災した大人や子どもたちが越谷市や三郷市、それに埼玉県内に大勢非難してきました。そこで、こうした子どもたちをどのように支えていくのかということを通して、日頃からつながりや絆を尊重する家庭・学校・地域をつくる

きっかけとなるのではないかと考えたわけです。今年度は、このような理由から、「東日本大震災によって県内に避難した子どもたちへの支援のための地域連携」というテーマで、このシンポジウムを企画させていただきました。三郷市や越谷市、それに県内各地に避難してきた子どもたちが安心･安全に暮らすことのできる学校や地域をつくっていくことは、とりもなおさずすべての子どもたちが求めている安心・安全の学校や地域となっていくものと思います。そいうわけで、今回のフォーラム・シンポジウムでは、三郷市や越谷市に非難してきた子どもへの支援、それから加須市などに非難してきた子どもへの支援を通して、どのようにしたら豊かな人間関係を築いていけるのか、またそのためには地域・家庭・学校・大学の連携はどうあるべきかなどについて考えていけたらありがたいと思います。そして、その成果をすべての子どもたちにお返しして行きたいと考えています。今回のフォーラム・シンポジウムを通して子どもたちが豊かな心を育むことのできる地域ができることを願っております。

それでは、本日の話題提供の方々と皆様との討論のきっかけを提供してくださる指定討論の方を紹介申し上げます。話題提供の方は、三郷市教育委員会の大野正浩様、越谷市教育委員会の斎藤紀義様、MiKOねっとの工藤トモ様、さいたまコープの根岸公江様、子育てサポートチャオの雲雀信子様です。指定討論の方は文教大学人間科学の谷口清様、司会とまとめは文教大学人間科学部の佐藤啓子様です。

[司会]

それでは、最初に大野正浩様、どうぞよろしくお願いいたします。

[大野]

三郷市教育委員会学校教育部指導課の大野です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。まず、お話に先立って三郷市の教育委員会の紹介をさせていただきます。三郷市教育委員会では、榎本教育長の理念もと、国の宝である子どもたちを明日を担う人材に育て上げていくことを使命とし、「読書のまち三郷」に力をいれて取り組んでおります。

さて本日は、東日本大震災により三郷市に避難されてきたご家族・子どもたちへの支援のなかで、三郷市がどのように取り組んできたのかということについて、その主なものを紹介したいと思います。3月 11 日の震災後、すぐに瑞沼市民センターを避難所として設置しました。福島県の広野町の方々が避難されてきたのですが、そのとき教育委員会として、何ができるか、三郷市に避難した子どもたちにどのようなことで支援できるのかということで、私の上司の星指導課長から目標を挙げていただきました。そして、「一日も早く通常の学校生活を送れるようにするには」ということを目標とさせていただきました。

取り組んだことのいくつかを紹介させていただきます。まず、避難所の体育館や教室等の床に各学校にある畳を集めるように手配しました。それから、制服や学用品なども準備して配布しました。衣類などは特に、学校から保護者や地域の方々に声をかけてもらって、制服やカバン、体操着などを提供していただきました。そして、春休み中の学習教室の開設には避難所から近い瑞木小学校と瑞穂中学校の教室を開放して取り組みました。また、休み中には、就学相談会を実施し、小中学校への転入・受入のための相談活動を行ない、迅速に転入手続きを進めるということを行ないました。

小学校は 44 名、中学校は 24 名が市内で学校生活を送ることになりました。最初は、新

しい環境に慣れなくて、「よく眠れない」「頭が痛い」「なんだかわからないけど不安だ」などといった訴えがありました。また、新しい教室・学級に馴染めないといった訴えも当然のことですがありました。そこで、学校で取り組んでいただいたことは、まずしっかりとした受入体制を整えていただくこと、養護教諭や相談員等に面談をしていただくことにしました。それから、三郷市には第一教育相談室と第二教育相談室の２つの教育相談室がありますが、そこにいる専任教育相談員にご尽力をいただき、主に瑞木小学校にほぼ毎日のように行っていただき、瑞木小学校の１教室を開放していただき、そこを相談室として相談活動を進めていただきました。それが４月から７月まで継続して取り組んでいただきました。そのおかげで、悩み等の解消が図られました。それから、専任教育相談員には、避難・転入者に見られる症状とその対応についての資料提供を市内の小中学校にしていただきました。その結果、すべての子どもたちの不安を解消することができました。相談室の利用者は統計に表れない分も含めて、毎日のようにありました。それらの子どもたちのなかには休憩したり、話をすることで心を落ち着かせる者もいました。

春休みの学習教室についてもう少しお話しをしたいと思います。ここでは体育やスポーツレクレーションに取り組みました。スポーツレクレーションでは、体育館やグランドを解放してバトミントンやサッカーなどを楽しみました。中学校では瑞穂中の生徒たちと交流活動も行ないました。そのことが新学期のスタート前の良い準備期間になったものと思います。

次に、瑞木小学校の運動会の様子を紹介します。瑞木小学校の運動会では、「頑張ろう、心はひとつ、運動会」というテーマを掲げました。運動会では、広野小の校旗と瑞樹小の校旗の両方を掲げて、入場行進を行ないました。そして、運動会のこの日を最後に広野町に戻る児童が何人かいましたので、閉会式の時にはお別れ会をしました。広野町の児童からは、ここで皆と一緒にもっと勉強したかったという声があがったということです。それから、山祭町からは、「もったいない図書館キャラバンカー」というキャラバン隊が三郷市の小学校にやってきました。これは福島県の山祭町の子ども司書 12 名と「もったいない図書館」の館長の金沢さんたちをはじめとするボランティアのグループです。広野町の子どもたちを励まそうということで三郷市に来てくれたのです。また、お世話になっている瑞木小学校と読書交流会を実施しようということも目的にありました。互いに読み語りをしたり、一緒に合唱をしたりして楽しい時間を過ごすことができました。山祭町では、移動図書館ということで、キャラバンカーがそのまま図書館になって貸し出しを行なっています。そのキャラバンカーが瑞木小学校にも来てくれました。

また、広野町に戻った児童から手紙が届きました。広野町に戻った後でも瑞木小学校の子どもたちと交流を続けているということです。早稲田中学校では、チャリティコンサートを行いました。広野町の方々に演奏を聴いていただいたり、生徒たちが募金活動を行ったりして寄付を募りました。

このように、普通の学校生活を一日も早く送れるように、短い期間ではありましたが、三郷市で過ごせて良かったと思っていただくために、取り組んでまいりました。以上で私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

[司会]

大野様、まことに貴重なお話、ありがとうございました。最初は不安でいっぱいだった

被災者や子どもたちも、その後はさまざまな活動を一緒にやることによって、次第に心も身体も安心感でいっぱいになっていった様子がわかりました。その後の交流も続いているということですが、大変素早い取り組みが子どもたちの豊かな交流をもたらしたものと思います。続きまして、斎藤紀義様、お願いいたします。

[斎藤]

皆様、こんにちは。越谷市教育委員会指導課教育センター担当主任指導主事の斎藤と申します。私は普段は、越谷市の増林地区にあります教育センターに勤務しております。業務的には何か地域と連携してやることは少ないのですが、いわゆる発達障害のお子さんや発達に課題のあるお子さんの就学の相談にのったり、特別支援教育担当として特別支援学級や通常学級のお子さんたちの支援や先生方への支援を行なったりしています。

越谷市の場合は、先ほど三郷市さんの話があったように、どこかの市町村だとか特定の学校から集団でお子さんたちが避難してくるという事例はありませんでした。ただ 3 月 11 日以降、越谷市の方でもいつでも受け入れられるように、総合体育館に畳を敷きました。また、市内の高齢者の福祉施設でも、いつでも入れるように準備をしました。集団で避難して来られることはありませんでしたが、家族で来られた方が何家族かありました。

今回のテーマの方から言いますと、私の普段の業務からは少し離れているのですが、私たちの教育相談というところで関わっていることについてお話をさせていただきます。教育相談ということで、お子さんが不安や何かを抱えていないかということで支援を行ないました。そのことに関して、学校の受け入れ状況にについて越谷市内の小中学校の調査を行ないました。小学校が 30 校、中学校が 15 校ありますが、受け入れの状況について 6 月と 9 月に調査をさせていただきました。また、越谷市内の小中学校計 3 校の校長先生へのインタビュー調査もさせていただきました。それらの内容をまとめて、今回のお話をさえていただきたいと思います。

6 月時点には、越谷市の 45 校のうち、小学校では 15 校、中学校では 7 校の合計 22 校で、被災をされた方々のお子さんの受け入れがありました。ちょうど、越谷市に設置されている学校の半分ほどです。児童生徒の数は、小学校が 32 名、中学校が 11 名の合計 43 名です。つまり、各学校には平均すると 2 名ほどのお子さんが入ってきたことになります。9 月時点では、受け入れ校が小学校 14 校、中学校が 6 校で、合計 20 校になっています。生徒数は小学校が 31 名、中学校が 12 名となっております。6 月時点と比較しますと、さほど動きはないように見受けられます。夏休みを挟んで、転出入があるかと思うんですが、小学校の方からは 6 名、中学校の方から 1 名が、こちらから転出していかれました。逆に小学生が 5 名、中学生 2 名が転入してきました。6 月から 9 月における越谷市内の小中学校の転出入の状況は以上の通りです。

このように、越谷市の場合、避難されてきた方々の多くはどちらかというともともと越谷市に住んでいたという方や、越谷市に親戚や知人があるという方がほとんどでした。また、これらの方々は地元に帰ることはなく、長期的に越谷市に住もうと考えておられることが特徴かと思います。夏休み明けにそれほどの転出がなかったのは、そうした理由によるものと思われます。

学校の受け入れについては、集団で入ってくるわけではなく、実際には２、３人で入ってきますので、何か特別大がかりな取り組みをしなければならないという状況ではありま

せんでした。１つの学校に入ってくるお子さんの数も少ないので、何か特別なことをすると、逆にそのお子さんにプレッシャーをかけてしまったり、委縮させてしまったりすることも懸念されました。そこで、受け入れにあたっては、普通の転入生と同じような対応をする学校が多かったようです。そのなかで、友だちや学校に慣れていただくようにしました。そうした事情は先生方は良くわかっておられますので、お子さん方への配慮や見守りをしっかりとやっていただくことができました。また、学校によっては、全校朝会や学級の朝の会などで避難してくることの大変さや、皆で仲良くしていくことの大切さを子どもたちに伝え、風評被害的なことが生じないような配慮をしました。このように、学校の受け入れとしては、本当に普通の家族が普通に引っ越してくるような形で受け止め、過度な対応によって受入側の子どもたちにも転入してくる子どもたちにも精神的な負担を与えないよう、各学校で取り組んでいただいたということです。

被災した方々が心配しておられたことは、物品がないということでした。先ほど三郷市さんでもありましたように、教育委員会でいろんな物品を用意するとともに、教育委員会だけではなかなかそろえきれないので、PTA が中心となって動いてくれたところが多かったようです。たとえば、PTA 会費を免除し、制服やカバンや教科書などについても PTA に集めていただいて対応したようです。また、社会福祉協議会の方でも教科書やランドセル、文房具、体育着などを用意していただいて対応しました。

学校中心の支援としては PTA や「おやじの会」などの活動が主なものですが、実際に被災者が引っ越してきた地域の方たちは、地域の自治会や子ども会が普段通りの活動を通して自然な感じで近所づきあいをするというような形で受け入れをしてくれております。このように、越谷市としては、通常の転居と同じように自然な形での受け入れを心がけてきました。

次に、教育相談における心理面の支援についてお話しさせていただきます。避難してきた子どものなかにはやはり不安をもっている者がおり、小学生で５名と中学生３名が不安や辛い思いをしているということで学校では対応をしております。避難した子どもとは別に、地震の後で不安をもった子どももおります。そういったお子さんへの対応ということで、教育センターとしては臨床心理士が常駐していますので、学校から依頼があったときは即座に支援を行なってきました。また、学校から訪問要請があった場合にもいつでも行けるような体制を整えました。また、学校の方には相談員さんもいますので、先生にはなかなか話しづらいということも話せるような準備をしました。中学校にはスクールカウンセラーがおり、その方々が子どもたちの相談にのってくれたということがありました。このように、学校がもっている資源を有効に活用し、それらの資源のネットワークを整えることによって、子どもたちの心の問題への支援を行なってきました。

そうした支援によって小学校の３名のお子さんは不安が解消しました。しかし、なかにはお母さんが仕事のため地元を離れることができないためお母さんと離れて暮らすことへの不安が持続しているお子さんもおります。そのお子さんの場合も学校相談員さんに話を聴いてもらっている間に、だんだんと不安が解消してきました。それにともなって学校生活にも落ち着きが見られ、今では学習にも意欲的に取り組んでいるということです。このように、小学生では現在不安を訴えているお子さんはおりません。

中学生の方は、受験や進路問題を抱えていることもあって難しいところがあります。そうした課題への不安と震災の不安とが重なって、困難な状況が続いているお子さんがおり

ます。こうした問題に対しては担任の先生や管理職の先生が協力しながら関わることによって、徐々に解消に向かっているようです。しかし、これについてはまだまだケアが必要だと考えております。

越谷市としては、以上のように普通の転入生として受け入れて、そのなかで必要な支援をしていくという考えでおります。ただ、お子さんたちは不安や困難を抱えていることについては各学校や教育委員会は認識しており、これに対するケアはこれからもいっそう充実させる必要を感じております。話が地域の連携とは若干離れてしまったところもありますが、越谷市の取り組みの実態ということで情報提供をさせていただきました。どうもありがとうございました。

[司会]

斎藤様、貴重な情報をご提供いただき、まことにありがとうございました。越谷市の場合は三郷市のように集団非難ということはなかったのですが、誰が、いつ、どのような形で避難してきても受け入れができるような準備を整えていたということが印象的でした。また、子どもたちの受け入れにあたっても普段通りの対応をすることによって、子どもたちに安心できる学校環境を提供できたものと思われます。私たちはともすれば、被災された人、特殊な人という目で避難された方々を見てしまいがちです。それによって、避難してきた子どもたちは、それでなくても不安や緊張が強いのに、特別視されることによってさらにいっそう緊張を与えることになってしまいます。越谷市の取り組みは、そういう事態を避けて、避難された子どもたちも受け入れ側の子どもたちもお互いにひらたくかかわることによって、お互いにとって安心できる学校環境をつくることができたものと想います。続きまして、MiKOねっとの工藤トモ様、ボランティア活動を通した話題提供をよろしくお願いいたします。

[工藤]

ただいまご紹介をいただきました特定非営利法人 MiKO ねっとの代表を務めております工藤トモと申します。どうぞよろしくお願いいたします。私は、3.11 東日本大震災によって三郷市の瑞沼市民センター内に設置された避難所内の「子どもたちのみんなの遊び場」において、プレールームを企画・コーディネートし、見守り・遊びのサポートを昨年の4月2日から7月31日までの約120日間にわたって行なった体験を発表いたします。

避難所には福島県広野町の皆さん約270人が避難され、子どもたちは60人ほどいました。まずは、特定非営利法人 MiKO ねっとの概要を説明させていただきます。MiKO ねっとは、三郷市の地域ネットワークです。約3年間の任意のテスト活動期間を終えて、2009年7月に NPO 法人格を取得いたしました。目的は、子どもを真ん中に、出会い・ふれあい・笑顔あふれる町づくりを目指しています。MiKO ねっとは、子どもの豊かな成長を願い、子育て中の保護者と一緒に子育てを支援することを行政が共に支え合い、あらゆる年齢層の子どもたちが、安心・安全に子ども時代を過ごせる地域・町をつくることを目指しています。事業内容としましては、ネットワークの拡充・情報交換・学習会・子育て関連事業などを行なっております。地域の子育て力をアップするために、人と人が出合う場・三世代交流の場つくりとして、子育てフェスタ・子育て講演会・パパ力スキルアップ・お下がり交換会などを行なっております。

三郷市の瑞沼市民センター内に避難所やプレールームが開設された目的や経緯について説明いたします。先ほど三郷市の方からもお話がありましたけれども、三郷市と広野町との間には、災害時の応援協定が結ばれていました。そして、大震災後に瑞沼市民センター内に避難所が設置され、約270人の方々が非難されました。MiKOねっとでは、私たちにできることはないのかということで、ボランティア登録をしました。約2週間後に、三郷市の社会福祉協議会がやっていた災害ボランティアセンターから連絡がありました。その内容は、瑞沼市民センター内の避難所には多くの子どもたちがおり、大人たちと一緒に集団生活を送っているが、子どもたちの遊べる場所が少ないためにストレスを溜めやすい環境にある､そこで周りに気兼ねなく思いっきり遊べる場や保育の場を避難所内につくり、心身の安定をはかることを目的にしたプレールームを開設したいが、どんなプレールームにするか相談にのって欲しいということでした。そこで、私たちは、プレールームの企画と遊びのサポートを担当することになりました。まず私たちは、日常的に常備している手作り遊具、段ボールのお家、段ボールのおままごとセット、魚釣りなどを持参して駆けつけました。市民センターは廃校になったもと小学校で、4階の音楽室に3時間かけてプレールームを設置しました。

120日間にわたった支援では、MiKOねっとの他、三郷市放課後子ども教室スタッフ、三郷市次代を担う若者の船の会、それに学生ボランティアや一般ボランティアが関わりました。プレールームは常設で、4月2日から7月31日までの122日間、朝の9時半から夕の5時半まで、1日を3区分に分けて活動しました。ボランティアとしては延べ1,128人（内、MiKOねっと関係者813人）、利用した子どもは延べ2,284人でした。

大震災を体験した子どもたちの様子についてお話しいたします。心理学上では子どもは大きな災害に遭うと恐怖や不安からさまざまなストレス反応を引き起こすと言われています。たとえば、暴力的になったり、物や人に当たったり、落ち込んだりします。これは誰にでもある当たり前の反応で、一過性の反応で、大人が気づかない場合もあると言われています。1カ月以上にわたって続く場合もありますが、安心で安全な生活を続けているうちに徐々におさまっていくと言われています。やはり瑞沼の避難所の子どもたちにも、そのようなストレス反応が個人差はありますが、大なり小なり見受けられました。それで、幼児や低学年の子どもは、当初、地震ごっこや津波ごっこをして遊びました。それで吐き出して、震災は過去のものというように心が整理されていったのではないかと思います。中高学年の子どもは、新しい土地に来て、自分がここで受け入れてもらえるのかなという不安があったようです。そうした不安を抱えていて、プレールームのボランティアにわざと悪態をついたり、時には小さい子のような行動をとったりしました。その時のボランティアの反応を見て、自分を受け入れてくれる人かどうなのかを確かめるというような行動が多々ありました。当初、部屋の隅でおとなしく折り紙を折っていた子どもたちも、やがて心が開放されてくると段ボールで基地や迷路をつくったり、戦いごっこをしたり、思いっきり身体を使って遊ぶようになりました。あるお父さんは、子どもがプレールームで遊ぶようになってから笑顔が見られるようになり、1カ月経ってはじめて学校の帰りに、1人で震災に遭ってから家にたどり着くまでのことを話してくれましたと、子どもが遊ぶことによって心の緊張が取れていった様子を話してくれました。

次に、心のケアや癒しとしてどんな対応をしたかをお話ししたいと思います。私たちは、プレールームは瑞沼避難所という大きな家のリビングと考え、子どもたちがいつでも自由

に出入りできる場所にし、子どもたちがやりたいことをやり、それによってストレスを発散できる場としました。朝の９時半から夕方の５時半まで毎日開設して、プレー担当のボランティアが常駐し、子どもたちを見守りながら一緒に遊ぶことによって、自分たちを見守ってくれる人がいるんだという安心感につながるように努力しました。やがて、学校から帰ってくると必ずプレールームを覗いていく子どもも多くなりました。宿題をしたり腹這いになって本を読んだり、自分たちの居場所となり、心のケアや癒しやストレス反応の軽減につながったと思います。新聞紙で作った新聞プールは癒しにつながったようです。また、戦いごっこはストレス発散に最適でした。時には戦いがエスカレートして、こちらから止めに入らなければならないこともありました。

次に、プレールームの運営を支えるボランティアの心構えについてお話しいたします。見守るボランティアとしては、子どもの話に耳を傾け、子どもと同じ目線で、子どもの心に寄り添って向き合うことが大切でした。急性ストレス反応の出ている子どもとの接し方はなかなか難しいもので、避難所のプレールームにいる子どもたちの心理状態は緊急避難時のものであり、さまざまなストレス反応はその子の特性ではなく、受けた災害の大きさに比例したものであり、自然で一過性の反応であるということをボランティア自身が心に留めておくことが非常に大切だと思いました。ボランティアは何かをしてあげなければいけないという気持ちから、どうしてもやってあげるということが主になってしまいます。そこで、子どもとの関係が保てなくなってしまうことがありました。子どもは、自分に寄り添ってくれる人なのか、それともやってあげなくてはと思っている人なのかを敏感に嗅ぎわけるようでした。ボランティア自身が共に遊び、子どもと一緒に楽しむことがとても重要でした。

二次避難前のお別れ会がありました。８割ほどの方がいわき市の方に避難をされるんです。普段はあまり中学生はプレールームには来ないんですが、この時はお菓子を食べながら一緒に交流を楽しみました。

今回の活動を通じて感じたことは、MiKOねっとの会員は日常的に子どもと関わる活動があったので、その経験が非常に役に立ちました。プレールームは、見守る大人とボランティア、それに子どもたちがお互いに作りあげていく居場所になったということです。しかし、見守る側は、いろんな考え方のボランティアの方がいますので、なかにはプレールームの目的や子どもの立場を理解しないまま携わっている方もおりました。大きな災害に遭遇し、急性のストレス反応を示している子どもたちの心をうまく受け止められず、子どもたちの行動や言葉遣いを矯正しようとして、うまく子どもとの関係がつくれない方も見受けられました。私たちコーディネートする立場の者としては、ボランティアの皆さんに子どもたちへの接し方を理解してもらうために苦労をしました。

災害はいつまた起きるかもしれませんし、避難所をいつまた開設しなければならないことがあるかもしれません。避難所内に、子どもの心身の安定をはかる居場所となるプレールームは絶対に必要です。子どもが遊びながら自分を出せる場所を継続して確保していくことは重要なことです。子どもにとっては、どんな状況にあっても人と人とが触れ合い、自分を表現できる方法を学んだり、明日へとつながったりする遊びの場は必要です。そして、その場を企画・コーディネートしていく人材の確保も必要です。そこで、日常的に子どもの心理やボランティアの作法を学べるようになればいいなと思っております。子ども心を理解する大人や青年が増えることは、地域の子どもにとっても大切な財産になるので

はないかと思います。このような学習の機会を今後私たちの方も企画していきたいと思います。最後になりますが、災害時の子どもたちためのプレールームを運営する際は、災害時の子どもの心理を見て、子どもの心に寄り添い、見守るようにしながら遊ぶことの大切さを本当に痛感しました。

七夕飾りには、「早く広野町へ帰れますように」というようなことが多く書かれていました。広野町は4月頃には避難解除になるようですが、1日も早く広野町の皆様が故郷に帰れることを私たちもお祈りしています。

[司会]

ありがとうございました。避難所でのプレールームの在り方について、貴重なお話しをいただきました。子どもたちを支援するためには、遊べる大人を育成することが大切なことを痛感しました。普段の私たち大人の関係においても、何かと教えることに重点を置きがちですが、同じ目線で関わることの大切をあらためて教えていただきました。それから、遊ぶということは楽しみを共有できることが大切であると思います。

それでは、続きまして、さいたまコープ地域ネットワークの根岸公江様、どうぞよろしくお願いいたします。

[根岸]

生活協同組合さいたまコープの地域ネットワークという部署におります根岸公江と申します。主に子育て支援を中心に活動をしております。今回は加須市旧騎西町にあります県立旧騎西高校に避難をされております双葉町の皆さんへの子育て支援について、報告をさせていただきたいと思います。さいたまコープの理念と子育て支援の内容を簡単に紹介しますと、Cocco ルームが北本市にあります。日常的には北本市から委託をいただいて子育て支援拠点と一時保育支援を行なっております。そこでは、さいたまコープの職員として雇用しているスタッフが子育て支援を行なっております。今回の被災者への支援では、さいたまコープの事業と組合員の活動を通じて、どのようなことができるのかという視点で取り組んできました。

旧騎西高校では、半日程度ですが、親子で来られる場所として「広場」を設けて、ちょっと子どもを預けたいんだけどという方のための保育を行なってきました。これらの場を延べにして 191 回設けました。それから、加須市の方でも、避難所の体育館のなかだけではなく、地元の旧騎西町の方々との交流をしていただきたいということで、旧騎西高校のすぐ近くにコミュニティセンターがありまして、そちらの保健センターの事業で取り組んできた「場の開放」というところに、私たちの保育士が伺って運営をしていました。また、月に1回、遊びの広場ということで、体育館などで思いっきり身体を動かせるようにということで活動を行なってきております。

それでは、経過についてご説明いたします。3月 19 日に、さいたま新都心のアリーナの方に双葉町の皆さんもバスでやってこられました。そこから私たちはボランタリーに関わりました。最初はシャワーが浴びられるようにとのことで、アリーナの建物から男女共同参画センター内にシャワールームを開放していただいたので、そちらへご家族の皆さんを案内したり、外の広場で遊べるような取り組みを行なったり、子どもたちの遊びを見守るというようなお手伝いをさせていただきました。

4 月になって、それぞれ町ごとに埼玉県内の各所に分散して避難して行きました。旧騎西町へは総勢 1,500 人が旧騎西高校の方に行きました。当初、4 月 4 日にスタッフが行ったときには、建物すべてが居住スペースになっていました。理科室などの固定式の机がある部屋が 1 つと音楽室が 1 つ残っているだけで、それ以外はすべて居住スペースでした。アリーナから旧騎西高校に行ったときには、名札を付けていて、できるだけ町名が近いところの方たちで部屋割をされていました。私たちのところが行ったときに、保育園の先生が子どもの状態を非常に心配していたんですけど、なかなか子どもたちに目が届かない、なんとか子どもたちを受けとめられる保育士が必要だということでした。私たちが行ったことで、それではなんとか保育の場所を探しましょうということになりました。一緒に施設内を回ったところ、体育館の用具室に「子ども部屋」という張り紙がしてあり、畳が不足気味ではあるんですが敷いてありました。春休み中だったので、そこで子どもさんたちがゲームをしたり、トランプをしたり、ごろごろしたりして過ごすことができました。

そこを活用して、4 月 4 日からそこに毎日行って支援をしました。当初は、MiKO ねっとさんのご報告にもありましたように、スタッフに物を投げたり、言動が乱暴だったりとか、そういう行動も多々見られました。毎日行くと、おもちゃが散乱していて衛生的にも気になりましたので、毎日お掃除をして環境を整え、いつでも小さいお子さんでも来ることができるようにつとめました。

あと、スタッフのボランティアの教育ということもあるんですが、スタッフの方もお母さん方からお話しを聞いたりしているうちに、自分が津波に襲われる夢を見たという話を聞くと、スタッフ自身も眠れなくなったりするということがありました。そこで、やはりスタッフに対する研修会や勉強会も大切であると感じ、ユニセフ協会の援助をいただいて、「安心・子どもにやさしい空間づくり―遊びを通じたケアについて―」というテーマで私たちも勉強をしました。そして、ユニセフのセラピストに私たちの取り組みの状況を聞いていただきました。それによって、とても確信が得られました。

そのようななかで、5 月の連休が明けると、福島県内のホテルとか民宿が避難所に開放されるようになりました。そこで、そちらを希望する方が出て、体育館の 2 階の用具室の利用者も減ってきました。アリーナにいたときは段ボールで部屋のなかに仕切りをつくっていたのですが、町の方針で仕切りはつくらないということになっていました。そのため、プライバシーのない状況のなかでお休みされていました。子どもが夜泣くと眠れなかったりするので車のなかで寝ていて、もう耐えられないという訴えもありました。中学生や高校生のお子さんも大勢いましたが、すぐ隣の見ず知らずの人たちがいるという環境でした。また、子ども同士で居場所がないため、夜間に周辺をうろうろしてしまったり、高校生が中学生の女子を連れまわしたりするといった不純異性交遊などと言われこともありました。そのように、若い人たちの暮らしの様子も垣間見られました。

旧騎西高校には行政の役場が来ておりましたので、やはりトップの方針というところで、避難所も運営されています。加須市も全面的にバックアップして、毎日のように役所の方も来ていましたし、学校等への受け入れもしていただいていたのですけど、やはり加須市の方も双葉町の意思を尊重して関わっていました。私たちも加須市さんとも交流をしながら双葉町の担当部署の方たちとお話しをして、双葉町の意思に沿うように工夫をしてきました。

その後、どんどん出ていかれました。やはり、小さいお子さんを連れて避難所にいるの

は大変ということと、双葉町自体が放射能から子どもを守りたいということで団体で埼玉県に避難してきたこともあり、双葉町としても埼玉県に慣れて欲しいという考えが強かったのかなと思います。しかし状況は必ずしも良くなっているといえないところがあります。子どもたちのなかには登園を渋る子どもも見られています。また、避難所での食事はお弁当でしたので、子どもたちのなかには朝ごはんがなかなか食べられないという子もいました。そこで、なんとか朝食を食べさせるために、自主的に味噌汁をつくることになりました。それから、おかゆから離乳食を始めて３日目で被災したという７カ月の乳児の場合は、こちらへ来て離乳食がストップしてしまいました。おかゆも出ていませんでした。高齢の方でおかゆ食が必要な方にも出ていませんでした。そのため、食事が取れないということでしたが、それでもおかゆを出してもらうことはできませんでした。インフルエンザが流行って病院に運び込まれる高齢者が出たことがきっかけで、ボランティアの方がおかゆを炊いてやっとおかゆを出すことができました。そこで私たちもユニセフの協力のもとで牛乳を提供することになりました。それにあわせて、お子さんへのおかゆの提供についても提案させていただきました。しかし、この時点ではいったい何人ぐらい離乳食を必要としている子どもがいるのかも把握できないという状態でした。学校や幼稚園のお子さんは正確な人数の把握ができるのですが、それよりも小さいお子さんについての把握がまだできていませんでした。

役場の方では、旧騎西高校が５箇所目の避難所であり、ここに少しでも長く居られるということでホッとしていますと言っていました。しかし、皆さん、家族がバラバラです。おじいちゃんとおばあちゃんは福島にいます、お父さんは福島にいます、お母さんは福島にいます、という家庭が少なくありませんでした。このように、家族がそろって同じところに避難していることはできていませんでした。埼玉県内に個別で避難している方々のなかには、もう３カ月間ほども同じ歳の子どもと遊ばせる機会がないと訴える方もいました。

また、避難所の方々は外にもなかなか出られない状況が続いています。どうしてかというと、双葉町にいたころは車で出かけることがほとんどでしたが、こちらに来ていわきナンバーの車で走るのは嫌だと言っています。これも双葉町の特徴かもしれませんが、集団で来ていますので、いわきナンバーの車で動くと、あれは双葉町の人という目で見られることが耐えられないのです。そのため、加須市で提供している地元の情報源にはなかなか行けないという状況が続いています。

七夕づくりのとき、やはり、双葉町へ帰れますようにという内容の七夕飾りが多かったのです。あるお父さんからは、「こんなことを書かせて」という怒りの声も聞かれました。自分たちの願いを言葉にすることができるというのも大事なのではないかと思いました。今では双葉町には帰れないんだということを子どもも大人も言葉に出すようになりました。でも、まだまだ補償の問題とか就業の問題があり、なかなか結論がでないので、大人も安定していないといった状況が続いております。この頃、そういう状況のなかでも、家が津波で流されてしまったという方なんですけども、子どもも学校に慣れてきたので、こっちに家を探そうかなという言葉が出てきました。

双葉町は集団で避難していることもあって、こっちに馴染みたいと親は思ってはいても、一方で幼稚園の保護者会に行くと、「双葉町の親御さんはこちらへ」という案内があり、結局地元の親御さんたちとのつながりがつくれないということもあります。3 歳児検診の場合も、双葉町の子どもと地元の子どもが別々に受けるということがありました。

今後は、双葉町以外からも埼玉県内に避難している方々が大勢おりますので、さいたまコープとしても各地の支所を拠点に多くの方々の交流の場に使っていただき、旧騎西高校の広場と合わせて、そういう場をもっと広げて行けたらと考えております。支援の内容がどんどん変わってくると思いますので、それに合わせた支援を継続して行なっていきたいと思います。長くなりましたが、これで報告を終わります。

[司会]

貴重なお話をいただき、ありがとうございました。被災した人たちの様子をつぶさにお伝えいただきました。被災した方が、どういうことに困っていたり、悲しんだりしているのかという現実の様子をお話いただきました。支援は、現実にしっかりと向き合うということから始めることが大切であるというご提言でもあると思います。根岸様、大変ありがとうございました。

最後の話題提供者は、子育てサポートチャオの雲雀信子様です。どうぞ、よろしくお願いいたします。

[雲雀]

皆さんこんにちは。越谷市で活動しております NPO 法人子育てサポートチャオの雲雀と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私どもは、今回の大震災にはあまり深く関わってはいませんが、今回話題提供をされた団体とのつながりから、話題を提供させていただくことにしました。MiKO ねっと様とは、団体を立ち上げる前から三郷市の要請で何度かご協力をさせていただきました。さいたまコープ様とは、平成 23 年度から地域子育て拠点事業を立ち上げ、「みんなの広場フェリーチェ」という親子の広場を開設いたしました。そこの会場をさいたまコープ様の北越谷店舗の別棟のコープメイトという建物をお借りしまして、週 3 日、親子の広場を開設させていただいております。また、文教大学様とは、佐藤啓子先生に設立当初からお世話になっております。また、毎年、学生のボランティアを実習生ということでお手伝いいただいております。また、小学生が大学で学ぶ埼玉県の事業であります越谷子ども大学では、文教大学様に大変お世話になっております。このように、いつも個々に地域のネットワークで連携させていただいております。

今日は皆様のお話を聞いて、大変勉強になりました。今日は、私たちが持っている課題を含めて話題を提供させていただきます。それではまず、私どもの団体の活動から紹介させていただきます。おかげさまで、今年で 15 周年を迎えることになりました。子育てを楽しめる社会をつくろうということを活動の目的としています。そのための学習の場の提供、仲間づくり、子育て中でも社会参画ができる環境づくり、などを活動の柱にしています。具体的には、主には公民館でやっております学習会への講師やスタッフの派遣を行なっております。また、県民健康福祉村のスポーツ施設で、子育て中の親御さんが子どもを預けてスポーツに参加できるような活動を委託運営させていただいております。また、みんなの広場フェリーチェでは、親子の広場や集いの広場を行なっております。

ホームスタート越谷というのは、昨年度から取り組んでいるものです。これは家庭訪問型の子育て支援です。地域の公民館での家庭教育学級や子育てサロンとか多くの取り組みがありますが、そういったところになかなか出て来られない親御さんがおります。そうした出て来られない家庭にこそ課題が多いということがあります。そういったところにボラ

ンティアを派遣する訪問型の子育て支援に新しく取り組んだということです。

今回の大震災に関連して私どもが最初に行なったことは、次のようなことです。3月19日頃からは越谷市でも体育館の方で救援物資の取り扱いを始めました。そこでボランティアを募集しているという情報が入ってきましたので、そうした情報を40名ほどいる会のメンバーに流しました。そして、物資の取り扱いなどのボランティアをさせていただきました。また、4月に入りますと、市内の高齢者施設の「くすのき荘」と「ゆりのき荘」に避難された家庭が集まってきているという情報が入りましたので、私どもも団体としてそのようなご家庭を支援できないだろうかと考え、チャオの代表と一緒にそれぞれの施設に参りました。そのとき、「それではあなた方は何ができるんですか」と質問されました。そのとき、あらためて何が提供できるかを明確にした上で伺わなければならなかったんだということを実感しました。そこで、会の活動趣旨や内容について説明し、子どもたちに遊びの場を提供したり、お子さんの保育や子育て相談などをしたりすることができることを話しました。

私どもとしては、そのときの訪問では避難した方々の状況やニーズを把握しようと思っていたんですが、居住スペースとなっている2階以上には案内していただけませんでした。そこで、受付に、私どもができる内容を箇条書きにして渡し、それを避難されている方々に向けて掲示してくれることになりました。ただ、残念なことに会へのご依頼はありませんでした。それから、受付でいろいろとお話しをしたときに、私たちは主には乳幼児を対象に支援を行なっているので、そのようなご家庭はどれくらいあるのでしょうかと聞きましたが、個人情報に抵触するという理由で教えてはいただけませんでした。

その後、ある新聞社の方から連絡をいただき、まったく知らない土地に来て、赤ちゃんを連れてバスや電車に乗るのにも困難をきたしているという方がいるという情報をいただきました。ちょうど、そのとき私たちはホームスタートという家庭訪問事業をしていることをその新聞社から取材していただいていたものですから、事業の趣旨にぴったりと合うご家庭ではないかと考え、私どものコーディネーターが連絡を取って、家庭訪問の活動を行なうことができました。

ここで、ホームスタートの活動の仕組みについてご説明をしたいと思います。ホームスタートは、もともとイギリスで始まった活動ですが、日本ではまだ新しいもので、取り組まれているところは他にはありません。私は、ホームスタートジャパンという日本で唯一の認定を受けたNPOの理事を務めております。この家庭訪問型の支援は、地域に出て行くことが困難な方々へ、ボランティアが週に1回訪問して、主に傾聴と協働をすることです。私たちチャオでは、もともとホームスタートに取り組む前から、ベビーシッターを派遣したり、産褥シッターということで家事の支援を行なったりしておりました。ただ、それは1回につき1,000円というお金をいただく有償の活動です。これに対して、ホームスタートはまったくの無償です。そこに行くボランティアもお金はもらわないことになっています。

このような形で個別に支援を行なうことはできました。しかし、団体や組織への支援を行なったり、それらと連携を組んで支援を行なったりすることはできませんでした。その理由として考えられる課題は、こちらの情報を相手に対して一方通行的に伝えたことがあげられると思います。それから、これまでの活動形態が個人で行なうということだったものですから、団体内の合意形成の難しさや団体で活動することのハードルが高かったのか

と思います。そのためには、日頃から地域連携を行なっていることが大切であると思いました。以上です。どうもありがとうございました。

[司会]

雲雀様、ありがとうございました。今日のお話しを聞きながら思ったことは、いざというときの受け皿づくりを懸命にやられたんだなということを感じました。待っているだけではなくて、積極的に訪問したり情報を流したりして、しまいにはホームスタートの家庭訪問支援に至った経緯がわかりました。災害は忘れた頃にやってくると言われますが、日頃からの地域連携があれば、いざというときに互いに助け合うことができるものと思います。今回の報告からは、そうした日頃の備えの大切さをあらためて教えていただいたと思います。

それでは、続いて指定討論の谷口先生、どうぞよろしくお願いいたします。

[谷口]

私は三郷市の教育相談室に関わっておりますが、今お話しがあったように、避難してきた子どもたちがどうも落ち着きがなくなっているというようなことがあって、なんとかできないだろうかという相談の会が 4 月 28 日にありました。で、そのときに、たまたま私が第二相談室にお邪魔する日になっていたので、私もそこに同席させていただきました。そこでその様子をうかがうことができました。私にとっては大変貴重な経験でした。そこでの様子は、後ほど、直接お子さんに関わった専任相談員の方にお話しいただきたいと思います。

それとは別に、私は市内のボランティア団体に入っていて、まだ日は浅いのですが、3回ほど瑞沼市民センターでの炊き出しの仕事を手伝わせていただきました。そこで、体育館の中に避難している様子や教室の様子、それに社会福祉協議会の方々の活動の様子を見させていただきました。そういう意味でも非常に貴重な経験をさせていただきました。その他、私事になりますが、私自身は仙台にしばらく住んでいたことや家内の実家が仙台だということもあり、身内に家が流された者もいます。友人にも同様のことがありました。その友人は自ら被災しながらも、多賀城の避難所でプレールームの運営に一生懸命に関わったりしています。

もう一点は、三郷市の支援体制は緊急のことではありますが、本当に行きとどいた抜群の支援だったと思っています。もちろん、広野町の皆さんがどう感じていただいたかに関わっていますが。私自身の印象としては、やはり大変な状況の中でなんとか適切に支援できたと思います。

このシンポジウムの目的あるいは今後の議論の方向ということですが、このシンポジウムの目的は先ほどご報告いただいた報告者の貴重な体験を記録にとどめて次への備えとすることだが第一のポイントだと思います。あるがままにお話しいただいたことをそのまま記録にとどめることが大事だと思っています。

今回の避難ということについては、やはりある種の特殊性があるのかなと理解しています。もちろん自然災害によって起こっているわけですが、三郷市に避難してきた方、あるいは埼玉県内に避難してきた多くの方にとっては、原発というなかば人為的災害というような側面もあって、その複合型の側面もあるということが、なかなか見通しのつけにくさ

につながっています。そのため、長期にわたる帰宅困難のなかで、親御さんたちも見通しが立たず、そのことが子どもたちの安定一不安定さの背景になっていたと思います。

その後、三郷市はホットスポットだということで、教育委員会の先生方にはその対応について大変なご努力をされていると聞いております。実際に子どもたちにとって大事なことはコミュニティが継続していくことです。それができて、はじめて子どもたちはきちんと育って行くことができるのです。コミュニティが崩壊して、それをまた再建いていくプロセスが今日のお話しのなかで見えていたのかなあと感じました。

やはり、このなかでの論点といいますか、私たちが共有していくこととして、当事者の立場と支援者の立場とを明確に区分しながら、その節度や留意点について明確にしていく必要があると思います。それが私たちの課題であると思っています。その一方で、私自身が被災地の子どもたちの話を聞くにつけて、子どもたちのしなやかさとかたくましさというのもありますし、避難所等においても子どもたちの存在は希望や救いになっていると思います。そういう点で、それぞれのお話しに共通していたように、子どもを守るという立場から、距離をもって見守るという仕組み作りが大事だということが強調されたと思います。そのなかで、三郷市と越谷市では、集団で避難してきたということと個別に入ってこられた方という違いはあったのですが、それぞれにその学校への転校ということでも、まったく一般の転校生（転入生）と同じ扱いをすることによって、それぞれの学校に馴染むように配慮していたことが共通点として強調されていました。ただ、一方でそのなかで子どもたちにとってはアイデンティティを守りつつ、それぞれのところに馴染んで行くというところに、どのように具体的に配慮するかが大切なのだということを感じました。そのためには、子どもとの関わり方を理解して関わるとか、あるいは対等な関係をつくるというご指摘は非常に貴重なものであると思います。

MiKO ねっとさんとチャオさんの違いのところで、チャオさんが訪問サポートを始められたという試みは非常に貴重なことだと思います。つい先日の新聞報道によりますと、東京湾北部のＭ７以上の直下型地震が５年以内に７割の確率で発生するとされています。今日も地震があり、頻度が増しておりますので、いずれ近いうちに私たち自身がそういう被災に備えるということがあるかと思いますので、そのためにも今日のお話しは皆さんで今後に生かしていきたいと思います。

[司会]

谷口先生、大貴重なコメントをありがとうございました。それでは、これからフロアーの皆様方とデスカッションに入りたいと思います。ただいま谷口先生からデスカッションの論点をお話いただきましたが、それはそれとして皆様方の自由なご意見や感想などをいただきたいと思います。どなたでも結構ですので、どうぞお願いいたします。

[今野]

それでは私からお話をさせていただきます。私は越谷市の小学校２校と中学校１校に、教育長の許可を得てインタビューをさせていただきました。これら被災した子どもを受け入れている３校すべてに共通しているのは、日頃から子どもたちを大切にしようという取り組みが校長先生をはじめとしてすべての先生たちの間に浸透しているということでした。それから人権教育に非常に力を注いでおりまして、いろんな違いがあっても皆が一緒にお

互いを大切にしながら生きていくという考えを子どもたちがきちんともっているということでした。それが、きっと影響したんだと思いますが、風評被害とか原発事故との関連できている子どもを特別扱いにすることが子どもたちの間にも見られないし、もちろん先生方の間にも保護者の間にも見られませんでした。ですから、保護者が安心して子どもを学校に通わせることができたという事例が３校に共通して見られました。何かあったから何か特別な対応をするというのではなく、日頃から子どもたちを大切にしていこうという努力が、実際に大変なことが起こったときに本当の力になるのだということを実感しました。

[星]

三郷市教育委員会の星です。今のお話を聞いて、子どもたちの心のしなやかさが大切なことだということですが、それに関してこういう事例がありましたのでご紹介させていただきます。先ほど大野指導主事の方で、広野町との協定のなかで瑞沼市民センターに避難された子どももいるんですが、直接三郷市の知人を頼ってこられた人もいるんです。そこには、ある小学校なんですけれども、直接津波に遭って、津波に追われて命からがら、家を失う、家族を失うという大きな心の痛手を負っているお子さんがいたんです。そこには教育相談担当の方に来ていただき、校長先生と相談して通常通りに受け入れていくわけですけれども、何か変化があったらすぐに応援体制をしきますというかたちでやっていきました。その子どもが、学校の教育活動のなかで三郷市は読書活動をやっていますが、図書室で阪神淡路大震災について書かれた本に出会うんです。その本を読んで、今は戻れないけど、本から学んだことと自分の思いを読書郵便のなかで被災地の子どもたちに宛てて書きました。それは読書感想文コンテストで最優秀賞をとりました。私はそれを審査していましたが、この思いはすごいものだなと感じました。いろんな人の支援とかさまざまなことを私たちは考えますけれども、子どもはいろいろな感情のもとで力強く生きて行くもだと思いました。それを見つけだしていくのは子ども自身であるということを実感しました。

共有する内容はやはり、さまざまなことがあるけれども子どものしなやかさを私たちはしっかりと受けとめながら、非難している子どもやそうでない子どもにかかわらず、一人一人の可能性を見ながら適切な支援をしていくことが大切であると感じました。

[司会]

星様、ありがとうございました。確かに子どもたちは適応力があり、いつまでも過去を引きずってはいない。そして、そのようななかで明るさを見つけだしていく。ただいまのお話は、そういう子どもたちに大人も学ぼうというというメッセージであると思います。

[藤原]

三郷市の外部相談員の藤原と申します。瑞木小学校に避難した子どもたちのなかに落ち着きをなくした子どもがいて、授業中も座っていられなくなったということがありました。保健室の利用がすごく多くなってきて、私たちが毎日のように聴き取りに行くことになりました。その理由の１つは体育館のなかで皆が一緒に寝るということで、眠れないということがありました。そのため授業中眠くなっていたものと思います。しかし、一斉の授業ですから眠るわけにはいかないわけです。保健室では毛布を与え、「安心して良いんだよ」といってあげると眠ることができました。体育館のなかはダンボールで区切られているだ

けで周りには知らない人が寝ているわけです。だから、安心して眠ることができないのです。そういうお子さんたちがずいぶんいました。そういうお子さんには、今申し上げたような対応をしていくだけで、ずいぶん安心してもらうことができたように思います。それから、いろんな相談の関係でいうと、市教委からの指示もありましたが、先生たちにこのような場合にはこのように対応しましょうということを提案しました。それは、先生方のなかにどう対応いていいか分からず混乱する方が少なからず見られたからです。ですから、先生方の不安を取り除くためには一定の指針やマニュアルが必要なわけです。もちろん、具体的な事例もあげて説明しました。そのような対応によって子どもたちも大分落ち着いてきました。

しかし、体育館で寝るということはやはりとても大変なことです。仮に私たちが寝たとしても、精神的な圧迫感を感じたと思います。それと、それぞれ子どもたちによって津波の被害を直接受けた子どもや原発の放射能から逃げてきた子どもなど、いろいろな子どもがいますから、そういったことによっても子どもたちの状況は異なるわけです。

[司会]

今のお話は、子どもをひとくくりにしてとらえてはいけないことや、個々の子どもの状況に応じた対応が必要なことを私たちに教えてくださいました。

[大貫]

私は三郷市の小学校で教員をしていますが、私の妹は広野町立広野小の教員をしています。この度は大変お世話になり感謝しております。今は、いわきの方に臨時の町の機能を設けています。小学校と中学校は1校ずつしかないものですから、高等専門学校に間借りして学校を再開しています。三分の一ぐらいの子どもたちが戻ってきています。そこで、言っていたのが、都会の人は怖いと思っていたというのが最初のイメージだったということです。しかし、皆さんに一生懸命にやっていただき、子どもたちが夢を語ることができるようになってきました。向こうでそういう作文を書くと、すごく人に役立ちたいという気持ちとか、困ったひとのために手助けができりようになりたいとか、広野町のために何かできることがあったらやりたい、ということを書くようになりました。子どもたちは、ボランティアの方々と触れ合って、そんなふうに変化したことを実感しました。今日ここにきてみて、行政の方とかMiKOねっとの方とか、その他大勢の市民の方々が連携して援助してくれているのを子どもたちは見て、すごく夢をもてない状況のなかで夢をもてたということを実感しました。子どもたちが将来の夢をもって広野町に戻るということが分かって、子どもたちの次のステップになるんだと思います。本当に皆さんのおかげだと感謝しています。

[司会]

本当に貴重なお話をありがとうございました。子どもが人間を学習するこというとはきわめて大切です。あまりにも平和な社会のなかでは人間に対する関心がもてないこともありまし、人間とは何かを考えなくても済んでしまうこともあります。しかしこういった非常事態が起きますと、いやおうなしに人間とは何かということや生きるとはどういうこと

か、あるいは将来はどうなるのかを考えなくてはなりません。そういうときに、大切なのは、どういう大人たちや子どもたちに囲まれて生活してきたかということです。人間の生きたモデルがどのように存在しているかということです。そして、大変な状況にありながらも一生懸命骨身を惜しまずに努力する大人たちがいると、子どもたちも自分でいつかそういう人になって困った人の役に立ちたいと極自然のうちに思うようになります。大人たちが自分たちのために一生懸命にやってくれるんだということを目の当たりにしてこそ生まれる学びだと思います。さきほどの星先生のお話にもありましたように、読書を通しての自分たちの未来につなげていくための態度形成ということも、阪神淡路大震災から子どもたちが学んだことだと思います。

[大竹]

MiKO ねっとの会員の大竹と申します。私は自分の子どもが小学校と中学校に通っていますので、その立場から一言申し上げたいと思います。先ほど、MiKO ねっとでプレールームのコーディネートをさせていただいたお話がありましたが、そこでのボランティアにも何回か行かせていただきました。ストレスを受けた子どもの様子を見て、一人のボランティアとしてどのような対応をしたら良いのかを考えさせられました。迷いながらも自分自身の勉強にもなったかなと思っています。乱暴な言葉遣いをしても、あくまでこちらは丁寧に返すと、そのうちに気持ちも落ち着くのかなと思いました。それから、なんかやって欲しいというように我儘を言い出すこともあるんですが、そういときにどこまでを聞いて、どこからはそれは自分でやってねということがありますが、それは自分の子どもに対してやるときと同じような気持ちでしたら良いのかなと思いました。あくまでも叱り付けたりするということではなく、その子を見守りながら尊重し、だけどハイハイと聞くだけの相手にはならないように心がけました。

子どもたちの受け入れ方も、広野町の子どもたちは結構運動神経が優れていて、運動会などでも活躍されていたので、「これからもずっといてくれたらいいね」などと好意的でした。広野町に帰られるときは皆悲しくて泣いていたくらいなので、特に小学校は 1 学年 1 クラスか 2 クラスの人数の少ない学校なので、広野町から友だちがきたことを皆喜んでいました。ですから受け入れる子どもたちというのは、避難者だという意識はそんなにもっていなかったと思います。新しい友だちという感覚で楽しく過ごせたのが良かったのかなと思っています。本当に子どもたちの力はすごいなと感じています。一旦帰られてからまた戻ってきたお子さんもいて、また三郷市を選んでくれたことを非常にうれしく思います。これを機会に親の方が変わっていきました。それとともに子どもたちの力を見直す機会にもなりました。

[司会]

貴重なお話をありがとうございました。これまで行政の方々、ボランティアの方々、一般の方々の取り組みのお話をうかがい、感謝の涙を禁じえないという心境です。こういう取り組みでは、心の居場所となる場所を確保することが重要だと思います。そこで、自分の心も身体も落ち着くことを実感してもらえると思います。そういう場所の確保が必要であると同時に、そこに関わる人たちが懸命に動いていると、それに触発されて子どもたちはそういう人間を見習って将来はそういう大人に近づくと思います。私たちは、何があっ

ても大人たちはそういう視点を見失わないで懸命に子どもに寄り添って関わっていくことこそが大切だと思いました。もちろんそのためには経済的な資源や人的な資源が必要です。場合によっては、それらの資源が十分でないこともあります。しかし、大切なことはそうした場合でも支援の心を持ち続けることだと思います。

今日は連携ということがテーマですが、私たちに残された課題は、それぞれのところでは懸命になさっていますが、どうこれらをつなぎ合わせながらより大きな連携として、チームとして、埼玉県内にあるいは各所につなげていくかということです。私はお話をききながらつくづく思ったことは、戦国の武将で毛利元就という方がいました。この方は、自分の息子 3 人に 1 本ずつの小枝を渡し、折ってみなさといったら簡単に折れてしまうが、3 本の枝を束にすると折れないことを体験的に自分の子どもたちに学習させたわけです。これは何をいっているのかといえば、毛利元就の時代は戦国という戦いの時代ではありますが、これは現代社会に置き換えても十分通じることです。つまり、1 本 1 本の小枝は小さくてもそれが 2 本になり 3 本になりまとまると、それ以上の力を発揮できることを教えているのです。これは生きるということについての想像性・創造性という先人の教えではないかと思います。1 人 1 人の力は弱くても協働・協力することによってより大きな力を発揮するということではなかろうかと思います。今日、ここにお集まりいただいた方々がつながっていくということも 1 つの連携なあり方だと思います。今後、それをここだけに留めるのではなく、少しでも多くの人々に広げ、より良い地域連携ができることを願っております。本日は、遅くまでご参会くださいましたことに深く感謝して、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

三郷市に避難した児童生徒への支援について

～通常の学校生活が送れることを目指して～
三郷市教育委員会

主な支援の経過

○3月11・12日：帰宅困難者への支援
○3月16日：瑞沼避難所設営（瑞沼市民センター）
○3月17日：避難者受け入れ支援
○3月23日：瑞沼市民センター内第2教育相談室の移設（避難所として場所の提供）
○3月28日～31日：避難した児童生徒のための春休み学習教室の実施
○3月30日～31日：就学相談会の実施
○その他：①制服、学用品の配布②自主学習室の設置③各学校にある畳を瑞沼避難所に提供④市内図書館の図書740冊を提供⑤避難所に4月12日より給食を開始

避難した児童生徒の状況

	受け入れ人数	不安等の相談件数(延べ)	改善・解消件数
小学校	44	49	49
中学校	24	5	5

※主な相談内容:眠れない、腹痛、頭痛、将来への不安、
クラスになじめない、友達のつくり方など

○学校の主な対応
- ・避難してきた方々への受け入れることへの指導
- ・個々に応じて、担任や養護教諭、さわやか相談員等による面談の実施

○三郷市教育相談室の対応
- ・専任教育相談員を避難した児童生徒を受け入れした学校に派遣し、相談活動を行った。(相談期間:4月~7月まで実施した。)
- ・「避難転入者に見られる症状とその対応について」の資料を作成し、市内小中学校に配布。

春休みの学習教室について

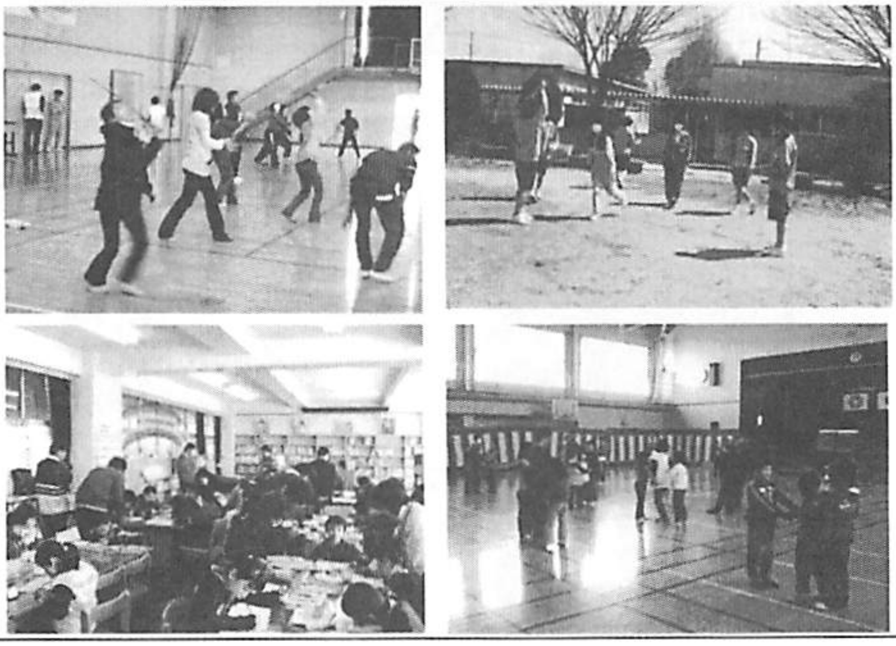
瑞沼市民センターに避難している児童生徒を対象に、近隣の瑞木小学校と瑞穂中学校の教室を一部開放し、学習教室を開設した。

参加者 児童39名 生徒21名

3月28日~3月31日午前中 3時間
1校時 算数・数学(プリント学習)
2校時 体育・レクレーション(校庭や体育館)
※在学児童生徒と交流をした。
3校時 国語 (プリント学習)

○市内小中学校の教員や学生ボランティアを動員して、学習支援を行った。
○学習プリントの準備
○人数分の筆記用具等準備

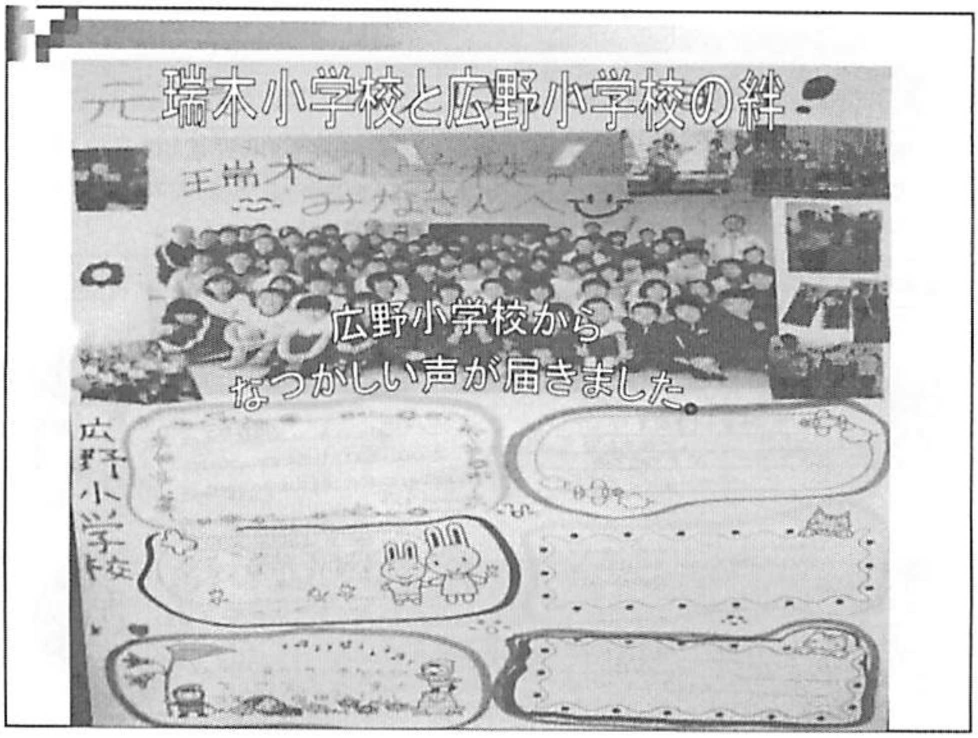
学習教室の活動の様子



「がんばろう 心はひとつ」運動会

瑞木小学校の運動会実施後に、福島県の広野町に転出する児童との最後の活動。互いに思い出に残る最高のものにするために、「がんばろう 心は一つ」をテーマに取り組んだ。

矢祭町もったいない図書館キャラバンカー
が三郷市(瑞木小)にやってきた！
瑞木小と矢祭町の読書交流会
瑞木小よる発表
頑張ろう日本！
読書でつなごう友だちの絆
三郷市・矢祭町読書交流会 in 瑞木小
福島県矢祭町
平成23年6月18日(土)


瑞木小学校と広野小学校の絆
広野小学校から
なつかしい声が届きました。
瑞木小学校のみなさんへ
広野小学校

チャリティーコンサート

ららぽーとスカイガーデンでチャリティーコンサート
～三郷市立早稲田中学校吹奏楽部～

三郷市立早稲田中学校は下記の日程で、東北地方太平洋沖地震・福島県双葉郡広野町の皆さんのためのチャリティーコンサートを、ららぽーと新三郷展スカイガーデンステージで行った。

当日は、広野町担当の飯島さんから、感謝の言葉をもらい避難している広野町の皆さんを含む、約600名の来客があった。
演奏後の募金活動では、213，200円の募金を集め、赤十字を通して、寄付。

吹奏楽部の部長、2年生の三浦綾奈さんは「自分たちの演奏で、広野町の皆さんが元気を取り戻してくれればいいと思う。わたしたちの力は小さな力ですが、今回のコンサートをやってよかった」とコメント。

●日時　3月29日（火）
第1回目　11:00～11:30
第2回目　13:30～14:00
●場所
ららぽーと新三郷
・スカイガーデンステージ

ご静聴ありがとうございました。

三郷市教育委員会

三郷市教育委員会
第二教育相談室

避難転入者に見られる症状とその対応について

ストレス反応のある人への基本的な接し方

◆そばにいる　◆親身になって話を聞く　◆叱咤激励は禁物
◆安心安全な環境で気持ちを受け止める　◆必要なら専門家、医療機関に

子どもに見られるさまざまなストレス反応（症状）、①からだ②行動③気持ち④考え方

症状	対応
① からだ ・眠りの問題 （寝つきの悪さ、夜中に目が覚める）、 ・食欲の問題 （おいしいと感じない、食欲不振・過食） ・腹痛・頭痛・便秘・軟便 ・体がだるい・重い	① 対応 ・叱らないで、無理をさせずに、 その時にできることをしてあげましょう。 （その時に食べたり飲んだりできる物をとれればいい、水分はこまめにとれるとよい） ・短時間でいいので話を聞くなどして、守られているという安心感を与えましょう。
② 行動 ・落ち着きがない ・はしゃぐ（空元気） ・怒りっぽくなる ・こどもがえり （一人でできていたことができなくなる） ・ひきこもる （学校に行くのを嫌がるようになるなど） 	② 対応 ・はしゃいでいる場合、心身が興奮してハイになっている表れです。一緒に付き合うなどして「大変だったね」などと言葉をかけながら、見守ってあげてましょう。 ・どんな気持ちか話を聞いたり、温かい対応をしてあげましょう。 ・普段と同じ接し方でいいので、対応はし続けて繰り返し安全感を強調しましょう。少し時間をさいて相手をしてあげましょう。叱らず、甘えることで子どもの心が癒されて、徐々に元気が回復します。
③ 気持ち ・とても怖い気持ち・不安 （いつもびくびくして、物音や暗い所を怖がる） ・イライラする （ちょっとしたことでイライラしてしまう） ・落ち込む （急に悲しくなって、涙が出たりする） ・何にも感じない （うれしいとか悲しいとかあんまり感じない） ・やる気がでない ・ひとりぼっちな感じ	③ 対応 ・不安や心配なことなどについて話をされると大人も嫌な気持ちになったり、「早く忘れなさい」と言ったりしがちですが、ゆったりと話を聞いてあげましょう。安心して子どもの心の傷が癒されます。 ・非常時の反応です。叱らずに危ないことについては止めてあげて、見守りつつ付き合ってあげましょう。 ・そばにいて、親身になって話を聞いあげましょう。 ・感情が麻痺しています。安心・安全であることを繰り返し伝え、そばにいて親身に話を聞いてあげましょう。 ・ストレス反応です。叱らずに見守ってあげましょう。 ・できるだけ一人にしないよう配慮しよう。遊び、作業、行事を通して"ひとりじゃない"と感じることができると心の絆が強くなります。

④考え方 → ④ 対応

④考え方

・集中できない

（遊びや勉強に集中できない、うわの空）

・考えがまとまりにくい

（自分の考えでいいのか自信が持てない）

・いきなりその時のことを思い出す

・思い出せない・忘れやすい

（ついさっきのことも忘れてしまう）

・自分を責める

④ 対応

・叱らずに対応してあげましょう。

・「まとまらなくてもいいんだよ」と優しく受け止めてあげましょう。少しでも言えたら褒めてあげましょう。

・親身になって話を聞いてあげましょう。

・思い出せないことを責めずに、受け止めてあげましょう。

・"悪い子だからバチがあたった"という捉え方をすることがありますが、自然現象だという事実を伝え、「頑張っていてエライよ」など良いところを褒めてあげよう。

※ 話を聞くときは深く掘り下げず、黙って受け身で聞いて、口を挟んだり遮ったりしないようにしましょう。

避難者（こども・保護者）にとって傷つくことば

「まだ被害が軽くてよかったね」

「まだ怖がっているの？」

「生きていただけでも感謝しようね」……歪曲するようなことば

「こんなことはなかったと思おう」……現実を否定することば

「落ち込んでても何も変わらないよ」

「学校に通えるだけで幸せだね」

「元気にならないとみんな悲しむよ」……過剰な励まし

「気分を切り替えて頑張ろうね」

「早くこっちの生活に慣れてね」

「(何が大変かを聞かないで) 大変ですね」

子ども達はなにより先生方のからの安心感と、子ども同士の交流で、元気を取り戻していくと思います。

避難者（こども・保護者）にとって傷つかないことば

「食べたり、寝たりは普通に出来てる？」

「慣れるのに時間がかかっても無理ないよ。」

「これからどうなるか。心配だよね。」

「力になれる人が大勢いるから安心してね。」

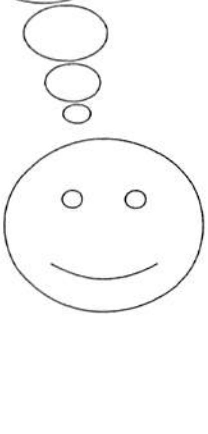
「自分のペースで良いんだよ。」

「もう大丈夫」

「今はいろいろできなくても恥ずかしいことじゃないよ」

「みんなが守ってあげるからね」

子どもには
「役に立っている」
「居てくれてよかった」
と認めて有能感をもたせて
あげよう♪



出典・参照

2011年 日本心理臨床学会・支援活動委員会

2010年 静岡県臨床心理士会・被害者支援委員会作成

「支援者のための災害後のこころのケアハンドブック」

災害時のメンタルヘルス【災害派遣医療ケアチーム用 簡易マニュアル】日本小児精神医学研究会

越谷市教育委員会

資　料

市内小中学校における
被災・避難児童生徒の状況について

1．被災・避難児童生徒の状況

○被災・避難児童生徒受入校数

○被災・避難児童生徒数

○不安等を訴えた児童生徒数

○休みがち・登校しぶり等を起こしている児童生徒数

2．不安・休み等の改善状況

○不安等の訴えや登校しぶりの報告のあった児童生徒数（延べ数）

○不安等の訴えや登校しぶりの解消・改善数

○不安等の訴えや登校しぶりの改善されていない児童生徒の状況

3．被災・避難児童生徒に対し学校が行った指導・支援

4．全ての児童生徒に対して学校が行った指導・支援

5．被災・避難児童生徒以外の生徒の状況

○不安等の訴え等のあった児童生徒数（延べ数）

○不安の訴え等の解消・改善数

【資料】

被災・避難児童生徒への対応（学校からの聞き取り調査結果の一覧）

1．被災・避難児童生徒の状況

	受入校数	被災・避難児童生徒数			不安等の訴え			休みがち		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
小学校	15	19	13	32	3	2	5	0	0	0
中学校	7	9	2	11	2	1	3	2	0	2
計	22	28	15	43	5	3	8	2	0	2

＊学校の主な対応

○担任が児童生徒に対して、または保護者に対して面談を行う。

○養護教諭や担任以外の教諭が児童生徒に対して、または保護者に対して面談を行う。

＊４月に転出した生徒について（５月３１日現在の一覧表には、名前はない）

●中３男子：A中に中２の妹と共に４月１日に転入するが、なじめず４月26日に同郷の生徒がいる他市町の中学校へ転出。転出前に２日間欠席する。他市町の中学校でもはじめ欠席することがあったが、現在は休まず登校しているとのこと。

妹は（中２）は、転出せずにA中に在籍している。

2. 不安・休み等の改善状況

	不安・休みがちな児童生徒（延べ数）			状況が解消・改善されている児童生徒			いじめやひやかし等の状況		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
小学校	3	2	5	2	1	3	0	0	0
中学校	2	1	3	0	1	1	0	0	0
計	5	3	8	2	2	4	0	0	0

＊改善されていない児童生徒の状況

学校名	学年・性別	欠席数	状　　況
A小	小6・女子	0	姉・弟。母が福島で仕事をしているため、週末しか母に会えないため、寂しさを訴えている。不安もあるようである。
	小2・男子	0	
B中	中3・男子	2	兄・弟。GWに地元に帰った後、越谷に戻ることを渋った。兄は部活も引退となったため、気持ちの発散の場がない状況がある。弟は部活動（野球）で気持ちを発散しているところもあるが、地元に戻りたい気持ちは変わらないようである。
	中2・男子	4	

3．被災・避難児童生徒への主な対応

対　　　応	校数
特にない（通常の転入生の受入の際と同様の対応）	19
学校生活に適応できているか丁寧に観察（担任との生活ノート、健康観察等）	4

＊その他

○PTAが被災・避難生徒の家庭からのPTA会費を免除とした。
○制服・鞄等の用意について、PTAが協力して行ってくれた。
○過年度の教科書を学校が購入して支給した。

4. 全ての児童生徒への指導

対　　応	校数
朝会等で、震災に関する避難について、避難してきた人を受け入れることについて等の話をする。	6
特にない（通常の転入生の受入と同様）	10

＊その他

○他県で被災・避難児童生徒に対し心ない言葉を言う等の事件があった際に、朝会で誰とでも仲良くしていうことの大切さを話す。

○引き渡し訓練の方法や実施時期を見直した。引き取り訓練を例年より早めに行うことで保護者が安心できるようにした。

○受入前に各クラスで道徳・特活で人権についての学習を行った。

●被災地からの転入であることを伝えないでほしいという依頼が保護者からあった。（1名）

5. 被災・避難児童生徒以外の生徒の状況

	不安の訴え等あった児童生徒	状況の解消・改善した人数	＊改善されていない児童生徒の状況
小学校	46	39	不安を訴えている状況は未だ残っている。学校としては、継続的に支援をしている。
中学校	68	68	
計	114	107	

＊学校の主な対応

○担任が児童生徒に対して、または保護者に対して面談を行う。

○養護教諭や担任以外の教諭が児童生徒に対して、または保護者に対して面談を行う。

A小インタビュー内容

３家族５名の児童が転入した。その内の２家族は夏休みまでに地元に戻った。現在は、１家族１名の児童（小４、女子）が在籍している。本児は、もともと越谷市内に住んでいたが、父親の仕事の関係で被災地（陸前高田）に引っ越したという経緯がある。

１．学校・学級の取り組み

・表面的には、特に何かするというわけではなかったが、自然な形で受け入れた。

・教科書、ランドセル、文房具、体育着などは、社会福祉協議会が用意してくれた。

２．配慮した内容

・本校は、以前からいじめや不登校問題に熱心に取り組んでいて、一人一人の児童を温かく受けとめる姿勢が教師や子どもの間に浸透していた。

・今回の大震災を契機にして、命の大切さや被災した児童を思いやる気持ちが一層強くなったと思われる。

・放射能汚染の風評被害に関する人権意識が教師の間に広がった。市の人権教育講義でも風評被害をどのように防止するかが話し合われた。

・教師の人権意識の向上が、児童間での風評の発生防止につながった。

３．放射能汚染に対する児童・保護者の反応とそれに対する対応

・児童や保護者の中には放射能汚染を恐れて屋外の活動やプール授業を拒否する者もいたが、それに対しては児童や保護者の考えを尊重した。また、給食や給食についてくる牛乳の摂取を拒否する場合にいついても同様に対応した。

・他の児童や保護者には、学校は個々人の意思を尊重していることを十分に説明し了解を得た。それとともに、放射能汚染の状況や危険度について説明することによって、安心・安全を担保した。

・また、放射能汚染に対する不安から当該児童への風評が出ないように、全教員が一致団結して慎重に対応した。

４．地域資源との連携

・震災等による帰宅困難児童の受け取り先はこれまで家族・保護者に限定していたが、今回の経験をきっかけにして、近隣の住民にまで広げた。それによって、地域住民の協力体制が整い、学校の児童を地域全体で見守る姿勢が強化された。

・本校はもともとPTAの協力が大きいことが特徴であるが、それに加えて父親を中心とする「おやじの会」の協力も大きい。今回の震災をきっかけにして、「おやじの会」が協力して、避難体制の見直しや地域との協力関係の強化に取り組んでいる。

・「おやじの会」や地域住民の集まりの際に学校側に協力要請があったときは教員や校長が積極的に参加し、地域との連携を強化している。

５．本児の話から
・最初の頃は、友だちにうまく話すことができるか、言葉が通じるかということが心配だった。
・現在は特に困っていることや心配なことはないが、まだときどき震災のことを思い出すと恐怖が蘇ってくることがある。震災に関係した悪夢を見ることはない。
・勉強について特に困っていることはない。むしろ、前にいた学校の先生よりも勉強の進め方が丁寧だと感じた。前の学校では、先生は生徒が理解していなくても先に進めていたが、この学校の先生は皆が分かるように教えてくれる。
・部活動は吹奏楽で、打楽器を担当している。今は大会に向けて練習をしている。
・友だちが皆優しくしてくれるので感謝している。

B小インタビュー内容

避難しているのは小学４年生の女児である。長男が、今春、近隣の大学に入学することになったため、越谷市内の県営住宅に転居した。当初は祖母（母親の実母）とその２人の孫も一緒だった。しかし、祖母と２人の孫は途中で福島に戻り、現在は４年生の女児だけが在籍している。

当初は福島弁を気にしていたが、１学期の半ば頃からは友だちもできて学校生活を楽しんでいる。成績は優秀である。母親（父親についての情報は語られない）は、当初不安や戸惑いが強く、担任や校長に学校生活の不安を訴えていた。しかし、最近は学校を信頼し、安心して子どもを学校に通わせている。

１．学校・学級の取り組み
・最初に、校長先生が始業式のときに、風評被害に気を遣って、福島県から来たことを子どもたちに伝えても良いかどうかを保護者に確認した。
・保護者の許可を得て全校生徒に伝えた。しかし、今にして思えば、触れないようにしてあげることも大切だったのではないかと反省している。

２．配慮した内容
・受け入れに対する配慮事項として、丁度宮城県から震災とは関係なく転校してきた子どもがいたので、その子どもと同じクラスに入れた。
・教務主任が転入の窓口になっており、うまく保護者が学校に馴染めるように配慮した。
・文房具等については市教委から支給があった。また、弘済会からお見舞いがでるということで、その手続きを学校がした。
・担任は、自然体で学級に溶け込めるように配慮した。
・もし子どもたちの中に差別的な態度がみられるようだったら、その時はきちんと対応するように校長から教員に伝えた。

・特別支援学級の取り組みや特別支援学級との交流を通して、差別意識のない学校づくりをしていることもあって、転入生への差別的な態度は見られなかった。

3. 放射能汚染に対する児童・保護者の反応とそれに対する対応
・放射能汚染に対する不安や風評は、生徒や保護者からは特になかった。プールの授業を拒否する子どもはいなかった。放射能に対する心配を訴える保護者はいなかった。
・最近、汚泥の中に基準値の2倍の放射能が検出されるということがあった。が屋内に設置されているということもあって、放射能汚染を心配してプールの授業を拒否するせいともいなかった。

4. 地域資源との連携
・地域のボランティアグループやNPOなどが行っている遊び活動を保護者に紹介した。と連携して、被災者に対して特別の支援をするということはなかった。その代わり、この経験を契機にして、地域のお手伝いをするように生徒に意識づけをした。
・生徒会が自主的に募金集めを行なった。

C中インタビュー内容

父親の会社の支所が学区内にあることから、親子3人で転居してきた。地元の小学校を今春卒業し、新1年生として入学した。学校としては通常に入学してきた新1年生として対応し、原発事故によって避難してきたことについては、生徒には知らせなかったが、本人からクラスの生徒に自己紹介のなかで転居の事情を説明し、9月ごろには地元に戻ることを話した。

野球部に入部し、エースとして活躍した。9月に地元に戻る前には、所属するクラスが本児のためにお別れ会を催した。

1. 学校・学級の取り組み
・生徒・保護者たちには特別な説明や配慮を要請することはなく、表面的には自然な形で受け入れた。
・両親とも学校を信頼しており、入学に当たって必要な配慮を学校に伝えてくれた。それによると、最低限の文房具とカバンや体育着などが必要とのことであった。これらについては、市教委とPTAの協力で対応することができた。
・教科書、文房具は学校で準備した。PTAの体育着などは保護者の協力で提供した。

2. 配慮した内容
・本校は、もともと人権教育に力を入れている。また、特別支援学級を併設しており、以前から生徒同士の理解促進と助け合いに取り組んでいたこともあり、教師も生徒も本児を

自然な形で受けとめる姿勢が整っていた。
・むしろ、本児の入学を契機にして教師の人権意識が高まった。

3．放射能汚染に対する生徒・保護者の反応とそれに対する対応
・放射能汚染に対する不安や風評は、生徒や保護者からは特に聞かれなかった。
・プールが屋内に設置されているということもあって、放射能汚染を心配してプールの授業を拒否するせいともいなかった。

4．地域資源との連携
・学校として、地域のボランティアグループやNPOなどと連携して、被災者に対して特別の支援をするということはなかった。その代わり、この経験を契機にして、地域のお手伝いをするように生徒に意識づけをした。
・生徒会が自主的に募金集めを行なった。
・クリスマスカードを被災地に送るボランティア活動を行っている中央大学の先生の呼びかけで、JRC委員会がカードを送った。
・震災直後には子どもたちが募金を集めて、JRC委員会が市役所に届けた。

東日本大震災・瑞沼避難所「みんなの遊びの場・プレイルーム」活動報告
子どもたちの心に寄り添って、共に遊んだ１２０日間

特定非営利活動法人ＭｉＫＯねっと
代表　工藤　トモ

３・１１東日本大震災後、三郷市の瑞沼市民センター内に避難所が設置され、福島県双葉郡広野町のみなさん約２７０人が避難されました（子ども約６０人）。ＭｉＫＯねっとは避難所内の子どもたちの「みんなの遊びの場・プレイルーム（常設）」を４月２日～７月３１日の約１２０日間に亘り、企画・コーディネートや見守り・遊びのサポートを行いました。

★「特定非営利活動法人ＭｉＫＯねっと」の概要

・三郷市の子育てネットワーク。現在、正会員（８団体、２５個人）、賛助会員多数で構成

・目的　子どもを真ん中に、出会い☆ふれあい、笑顔あふれるまちづくり
子どもの豊かな成長を願い、子育て中の保護者と子育てを支援する人、行政がともに支え合い、あらゆる年齢層の子どもたちが安心・安全に子ども時代を過ごせる地域“まち”をつくることを目指している。

・事業内容　ネットワークの拡充、情報交換・交流・学習、子育て関連事業など。
地域の子育て力をアップするために、人と人が出会う場・三世代交流の場づくりとして、子育てフェスタ・子育て講演会・パパ力スキルアップ講座・おさがり交換会、子どもの体験活動などを実施。

★三郷市の瑞沼市民センター内にプレイルームが開設された目的・経緯

・三郷市の瑞沼市民センター内に設置された避難所には、福島県双葉郡広野町のみなさん２７０人が避難

・埼玉県三郷市と福島県双葉郡広野町の間には災害時応援協定が結ばれていた。

・ＭｉＫＯねっとは、避難所が設置された後、何か私たちにできることはないかとボランティア登録。

・災害ボランティアセンター（三郷市社会福祉協議会）から依頼
「避難所内に子どもたちが周りに気兼ねなく思いっきり遊べる場、またホッとできる場を作り、子どもの心身の安定をはかることを目的にしたプレイルームを開設したいが、どんなプレイルームにするか相談にのって欲しい」と連絡があり、プレイルームの企画・コーディネート・遊びのサポートを担当。
プレイルームの企画・コーディネートは、ＭｉＫＯねっとの理事が担当。

★瑞沼避難所「みんなの遊びの場・プレイルーム」の開設・利用状況

１２０日間に亘った「プレイルーム」の活動には、ＭｉＫＯねっとの他、三郷

市放課後子ども教室スタッフ、三郷市次代を担う若者の船の会、学生ボランティア、一般ボランティアなどが係わった。

・２０１１年４月２日～７月３１日（常設・１２２日間）　９：３０～１７：３０

・一日３区分　９：３０～１２：００　１３：００～１５：００　１５：００～１７：３０

・ボランティア　延べ　１，１２８人（内　ＭｉＫＯねっと関係者　延べ　８１３人）

・利用した子　延べ　２，２８４人

★大震災を体験した子どもたちの様子

・大災害に遭遇して、恐怖や不安から様々なストレス反応（暴力的になる・物にあたる・落ち込むなど）が個人差はあるが、大なり小なり見受けられた。

・新しい土地で自分が受け入れてもらえるのかという不安（余分な不安）を抱えて、プレイルームのボランティアにわざと悪態をつく。

・地震ごっこや津波ごっこをして遊び、吐き出し、徐々に震災は過去のものとして心が整理されていく。

・当初、部屋の隅でおとなしく折り紙を折っていた子たちも、やがて、ダンボールで基地や迷路をつくったり、戦いごっこをしたりと自由に思いっきりからだを動かし遊ぶようになり、無心で遊ぶことにより心の緊張がとけていった。

★心のケアや癒しとして、どんな対応をしたか

・プレイルームは瑞沼避難所という大きな家の居間・リビングと考え、子どもたちがいつでも自由に出入りできる場所にした。

・ボランティアが常駐し、子どもたちを見守り、尊重し、一緒に無心に遊ぶことで、「自分たちを見守ってくれている人がいる」という安心感につながるように接した。

・学校から帰ったら必ずプレイルームを覗いていく子も多くなり、宿題をしたり、腹ばいになり本を読んだりと、自分たちの居場所になり、心のケアや癒しにつながり、ストレス反応が軽減。

★プレイルームの子どもを支えるボランティアの心がまえについて

・見守るボランティアは、「子どもの話に耳を傾け、子どもと同じ目線で、子どもの心に寄り添って、共に遊ぶ」こと大切。

・急性ストレス反応の出ている生身の子どもとの接し方はなかなか難しいが、

避難所の「プレイルーム」にいる子どもたちの心理状態や行動は平時ではなく、緊急避難時のものとの理解が必要。

・様々なストレス反応は子どもの問題ではなく、受けた災害の大きさに比例したもので、自然で一過性の反応であることを理解すること大切。

・ボランティアは「何かをしてあげなければという気持ち」から、「やってあげる人」となりがち。子どもと対等な関係ではなくなってしまう場合も多いので、ボランティア自身が共に遊び楽しむことが大切。

★今回の活動を通して感じたこと

・ＭｉＫＯねっとの会員は日常的に子どもと係わる活動を積重ねてきたので、その経験が多いに役立った。

・プレイルームは子どもたち自身と見守るボランティアで一緒に創り上げ、みんなの居場所になった。

・ボランティアの方が、プレイルームの目的・子どもの立場・子どもとの関わり方を理解しないまま携わっている場合は、即、子どもが見抜き、うまく関係がつくれないことも多かった。企画・コーディネートする立場としては、ボランティアの方々に子どもとの関わり方を理解してもらうことに苦労。

・長期の避難所を開設する場合、避難所内に子どもの心身の安定をはかり居場所となるプレイルームは絶対必要。子どもにとってはどんな状況下にあっても、人と人とがふれあい、相手との距離の取り方を学び、自分を表現でき、明日への生きる力につながる“遊び”の場は必要。

・その場を企画・コーディネートしていく人材の確保も重要。

・日常的に市民が「子どもの心理（災害時の子どもの心理も含む）」や「ボランティア学」を学べる講座の必要性。子どもの心理を理解する大人や青年が増えることは平時の子どもたちにとっても大切な財産。

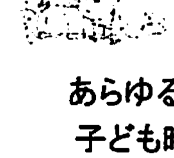
・災害時の子どもの心理を理解し、子どもの心に寄り添い、見守り、共に遊ぶことが一番大切と痛感。

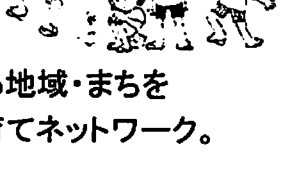
子どもたちの心に寄り添って
共に遊んだ120日間

特定非営利活動法人MiKOねっと
工藤 トモ

特定非営利活動法人MiKOねっと は・・・

子どもを真ん中に　出会い☆ふれあい
笑顔あふれるまちづくり





あらゆる年齢層の子どもたちが
子ども時代を安心・安全に過ごせる地域・まちを
つくることを目指す三郷市子育てネットワーク。

特定非営利活動法人MiKOねっとの活動

地域の子育て・子育ち力をアップするために、人と人の出会う場、三世代交流の場づくり、ネットワークの拡充・情報交換・学習を推進しています。

- 子育てフェスタ
- 子育て講演会
- パパ力スキルアップ講座
- お下がり交換会
- 子どもたちの体験活動

福島県双葉郡広野町避難所
瑞沼市民センター

・災害ボランティアセンターからの依頼

避難所内に子どもたちが回りに気兼ねなく思いっきり遊べる場、またホッとできる場を作り、子どもの心身の安定をはかることを目的にしたプレイルームを開設したいが、どんなプレイルームにするか相談にのってほしい。

みんなの遊び場・プレイルーム

- 2011年4月2日～7月31日（常設122日間）
- 企画・コーディネート　MiKOねっと理事
- 利用した子　のべ2,284人
- ボランティア　のべ1,128人

（MiKOねっと会員、三郷市放課後子ども教室スタッフ、
三郷市次代を担う若者の船の会、学生ボランティア、
一般ボランティア）

今回の活動を通して感じたこと

- 日常的に子どもと共に活動していた積み重ねが緊急な対応に役立った。
- プレイルームは子どもたち自身と見守るボランティアで一緒に創り上げていくみんなな居場所となった。
- ボランティアのかたが、プレイルームの目的・子どもの立場・子どもとの関わり方を理解しないまま、携わると子どもたちは即反応して、場が荒れてくる。
- 子どもの心に寄り添い、見守り、共に遊ぶことの大切さを痛感。

大震災を体験した子どもたちの様子

- 大災害に遭遇して、恐怖や不安から様々なストレス反応(暴力的になる・物にあたる・落ち込む)を個人差はあるが大なり小なり見受けられた。
- 自分を受け入れてもらえるか不安(余分な不安)を抱えて、ボランティアに悪態をつく。
- 地震ごっこや津波ごっこをして、吐き出し、徐々に震災を過去のものとして心が整理されていく。
- 当初、おとなしく折り紙を折っていた子たちも、思いっきり身体を動かして無心に遊ぶことにより緊張が解けてきた。

心のケアや癒し

- プレイルームは避難所という大きな家の居間・リビングと考え、子どもたちがいつでも自由に出入りできる場所。
- ボランティアは、子どもたちを見守り、尊重し、一緒にいることで安心感を与えるよう接する。
- 子どもたちの居場所になり、ストレス反応が軽減。

子どもたちを支える ボランティアの心構え

- 子どもの話に耳を傾ける、子どもと同じ目線で子どもの心に寄り添う
- 子どもたちが平時ではない状態におかれていることを理解する
- 様々なストレス反応が子ども自身の問題ではないことを理解する
- 子どもと対等な関係に立ち（何かをしてあげなければいけないという気持ちではなく）共に遊びを楽しむ

避難した子どもたちへの支援
旧騎西高校でのとりくみを中心に

さいたまコープ地域ネットワーク
根岸　公江

さいたまコープ

避難された子どもたちの笑顔のために

経過

- 3月19日　　　　さいたま新都心アリーナで出会い
  3月いっぱいで旧騎西高校へ　ママたちは、あの子たちは、どうしているだろうか
- 4月4日　旧騎西高校へかけつける
  体育館2階「こどもべや」(用具室)で"おやこのひろば"平日の午前中スタート
  Coccoルーム北本のスタッフが、2人体制で運営
  4月5日～9月20日まで　のべ117回　672人の子ども保護者の参加
- 5月以降　あっというまに、避難所の人数は減
  4月～5月中旬まで、インフルエンザが流行し、棟をこえた行き来禁止に。
  小さいお子さんがいる家庭は近隣のアパートなどへ
  日本ユニセフ協会から　スタッフ研修
  プレイセラピー「こどもにやさしい空間づくり」

4月当初の様子

毎朝いくと、おもちゃが散乱し、片づけがスタッフの仕事・・・の日々でした。
物を投げたり、言動が乱暴な様子もみられました

ニーズはひろば より 保育・・・

・土台となるくらしがあればこそ"ひろば" に参加できる

・行政の施策が反映される

子育てしやすい環境、幼稚園公設、保育園は公設なし、公園やサロンでお友だちづくりという必要あまりなかった(近くに親戚、いとこどうしで遊べる、周りで遊べる環境)

→保育園関係は、埼玉にこなかった避難所からアパートに出て、外にでない

→サロンのような場や一時的な保育が必要になったが、担当する職員(や保育士)はいない。経験もない。幼稚園の先生方が子どもたちのことをとても心配しており、行政の求めていたこととマッチしてスタートした

7月 体育館が居住空間でなくなった(教室棟へ移動により)機会に、待つばかりでなく、ポスターの掲示＋避難所内を訪問し、お声かけ

8月 こどもにやさしい空間として
おやこのひろば→8月23日からふたばこどもひろばへ
日本ユニセフ協会が支援

"ふたばこどもひろば"は、Coccoルームから保育士1人、社会福祉法人愛の泉から1人の2人体制で平日2時間継続

10月 加須市内、埼玉県内に住む避難者の皆さんの拠点として交流の場になれば・・・
→双葉町の方へは郵送でお知らせすることになりました

- 加須市主催"子育てサロン"騎西コミュセンにて、4月から月2回行われています
- 加須市民と双葉町民と一緒に子育て・・・をめざして、始まりました。
- 加須市子育て支援課と相談し、旧騎西高校体育館用具室と合わせて、Coccoルーム北本のスタッフが運営でスタート
  (8月からは、愛育会のボランティアや社福愛の泉さん)
- 月2回開催 (4月～9月20日まで)のべ9回 126人参加
  避難している方の参加はのべ2組…。その後ありません。
- 避難所で子どものために何かしたいと訪れる団体と一緒に"あそびのひろば"月1回日曜日に開催
  NPO、幼稚園、社会福祉法人、臨床発達心理士会、ボランティア団体、埼玉大学の学生、学童保育・・・さいたまコープの職員のフットサルチーム、組合員活動『ふれあい喫茶』
- (6月～9月)のべ4回160人の参加
- これからも、地域ネットワークをつなげて、埼玉県や首都圏に避難している方々を対象に、普段のくらしが戻るよう....
  できることを続けていきます

☆ 4月～5月の声

子どもたちは、夜泣き…、学校いきしぶり、朝食、弁当の心配　一母たち

おかゆから離乳食をはじめて3日で震災。離乳食はストップ。

一7ヶ月のお子さん

5月中旬になり、日曜日交代で休みがとれるようになりました。

一役場の職員

☆ 6月～7月の声

小さい子ども2人つれてバスや電車で移動したり、公園やひろばにいってお友達をつくるということをしたことがない。

一外出しないため3ヶ月間同じくらいの子どもと遊んでいない。避難所からでてアパートにいるあるママの言葉

地域の人たちからかわいそうな人たちと思われるのがいや　一あるママ

日本一暑い熊谷の近く・・・どれほど暑いのか!!　一声多数

七夕飾りに託す願いは・・・双葉町に帰れますように　一声多数

しあわせがきますように　一高校生女子

子どもたちには福島から脱出してもらいたい、子どもたちをまもらなければと思って埼玉県にきました。　一副町長さんの言葉

☆8月～9月の声

夏休みの後半、福島で小学生・中学生が再開。卒業式も行いました。

子どもは会えてとても喜んでいたけど、その反動で、別れが辛くて辛くて。

こちらの小学校にやっと慣れたけど、新学期学校行けるかな～。

一小学生2人のお母さん

保育園にいっていたのに、こっちに来てからママやおばあちゃんからはなれられなくて、おばあちゃんがみている。「もう一日中だから、くたびれる～にくらしいこともいうようになって。かわいいって思えなくなるわよ」

一2才の女の子のおばあちゃん

子どもも学校に慣れてきたし、こっちに家をさがそうかなと思って～

一3児のママ

※周辺の声

こんなもの食えるかとどなって、弁当をすてている

—そういう話を聞いたと他市の市民

加須市のある小学校で夏休みの宿題の自由研究で、騎西高校のくらしとして、『僕たちは倹約して節電してつつましくくらしているのに、騎西高校は夜遅くまで電気がついている。お酒を飲んでお弁当はたくさんすてている・・・』ということをまとめたレポートを提出した子がいる。

—家族が小学校の先生で、そこから聞いたという、他市の市民

東日本大震災により県内に避難した
子どもたちへの支援のための地域連携

～文教大学第2回　地域連携フォーラム～

【話題提供者】
NPO法人子育てサポーター・チャオ
理 事　雲 雀　信 子
℡/fax 048－971－3808
http://www10.plala.or.jp/koko-net/
E-mail: sapo@koko-chao.com

チャオの活動紹介

- 子育てを楽しむ、子育てを楽しめる社会を作ることを目的に、『学習の場の提供』『仲間づくりの場の提供』『子育て中でも社会参画できる環境づくり』などの活動を行う。
- 公民館の家庭教育学級などの講師や保育
- 県民健康福祉村のベビールーム
- みんなの広場フェリーチェ
- ホームスタートこしがや

大震災に関連して行ったこと

- 市の救援物資への協力
  - ・3月19日～市内体育館での物資回収
- 市内の避難所への情報提供
  - ・くすのき荘、ゆりのき荘への訪問
- ホームスタートこしがやでの家庭訪問
  - ・双葉町からの転入者宅への家庭訪問

ホームスタートとは

- 家庭訪問型子育て支援
- ボランティア（ホームビジター）が週1回訪問
- 友達のように寄り添い、傾聴と協働を行う

【お問い合わせ】
NPO法人ホームスタート・ジャパン
http://www.homestartjapan.org/

地域連携の課題

- o 一方通行の情報
  - ・個人情報は伝えられない
- o 団体内での合意形成
  - ・団体として何ができるのか？
- o 日頃からの地域連携
  - ・団体の認知度を上げる

ホームスタート・ジャパンの取り組み

- o 加須市での取り組み
  - ・ホームスタートかぞ　の出前広場
- o 被災地域での取り組み
  - ・岩手、宮城、福島での活動支援
- o 避難家庭支援の取り組み
  - ・避難者が多い地域への支援
  - ・被災家庭支援のボランティア研修など

平成23年度文教大学経営戦略事業
第2回地域連携フォーラム・シンポジウム報告書

東日本大震災により県内に避難した子どもたちへの支援のための地域連携

平成24年3月発行
文教大学大学院人間科学研究科
研究科長　神田　信彦
事業担当　今野　義孝
佐藤　啓子
谷口　清